



PHOBIA

第五節/最終節

霜月音響

art 赤津豊

キャラクター紹介

神無^{かんな} イオという人物の身体を使う第

三人格。イオや神威の過去に触れ、自分が何者かを知った神無は、より強く自分であるため、斐文に執着する。黒い魔人。

斐文^{ひふみ} 神無を利用し、神を討とうと企む

傀儡。アインオリジナルの身体に大昔の殺戮兵器の頭脳を入れたもの。自分というものに苦しみながらも最後の希望、神無に手を伸ばした。青い魔人。

神威^{かむい} イオという人物の第二人格。スネ

イルから外の世界に出たがっているようだが、理由は不明。破壊衝動と暴力的感情として神無に影響を及ぼしている。

イオ X・10。神無たちが使う身体の主人格。温和で優しい性格だがアインのことになると歯止めが効かない。アインを救うというその一点で神無に手を貸している。

アイン ブレイン1。神の頭脳の一人。X No.を作り、イオに命の器を与えた張本人。死んだはず、だが……。

×一^{ばういち} 神の塔出身の謎の男。直接的な干渉は極力せず、斐文と神無に道を示している。壊れた斐文を塔に回収した。塔の現状を知る数少ない人物。

ヤハヴェ 神無と斐文を白い魔人から助け、死んだはずの男。神無と斐文を導くようなことを言っていたが詳細は不明。

ゼクス 騎士団所属の男。×一との戦闘により重傷。

アーシヤ 騎士団員。機動機『エクスマ』を駆るお嬢様。スネイルで財を成した人物で、騎士団のスポンサーをやっている。

キリツサ 騎士団所属の団員、ではなく、空我の見張り役。槍をボウガンのように打ち出す鞆で戦う。一人称は『あちし』。

空我^{くうが} 騎士団の団長。紫の魔人を一撃で屠り、キリツサと協力して、疲弊した黒い魔人を捕獲する。

ねくら ギルド所属のゴスロリ少女。大鎌を振り回し、投棄しながら戦う戦闘スタイル。騎士団所属のアーシヤとは年が近く、一方的に遊び相手だと思っている。

ビート ギルド所属のギター男。ギターを使った戦闘術で戦うが、現在は黒い魔獣との戦いで重傷を負っている。

ガイア ギルド長。蹴り技主体の戦闘スタイル。灰汁の強い団員をまとめるカリスマはあるものの性格のせいかまとめきれしていない。

この街、スネイルは殻で囲まれた街。

人工的な風や、雨が人々の暮らしに彩りを付ける。

空を見上げると目に入る外殻の、無言の圧力を緩和するための彩りが。

カンカンカンカンッ。

この街で一番高い電波塔の展望台から更に出て、薄い非常階段を鳴らしながら、少女は息を荒く踊り場に立った。

目に映るのは一面の夜景。

その夜景に少女は目を輝かせ、大きく深呼吸をした。

そして、メロディーを口ずさむ。

『私の声は聞こえていますか？ 私の言葉は届いていますか？』

どこかで聞いたような、誰かが歌ったような。そんなノスタルジックな気分になるようなメロディー。

眼下の騒音に溶けるように染み入ってゆくメロディー。

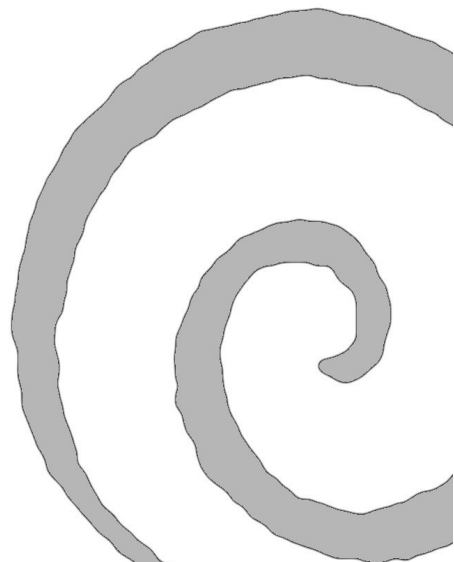
電波塔の上で、少女は歌う。

『私の声、聞こえますか？』

貴方の声が

まだ、聞こえません』

第五節



煌々と明るい会議室で老人たちが激しく言い争っている。

「魔人は今何処にある！」

「今は騎士団が抑えている」

「何としてもこちらに引き渡させなければ」

「しかし、どうする？ 我々は均衡を崩すわけにはいかない」

「理由を持たぬ話し合いじゃ、騎士団は魔人を手放さないぞ」

「くそつ、フォーティーム。見張りも満足にできんのか」

答えも出ないような意味の無い話し合いを続け老人たちに、席にいた女性がため息をついた。

（ダメだ、この老害共。世界が動いていることを理解しようとしてもしていない）

机の上に置かれた書類を鞆に詰め込み、女性は席を立つ。

「ワタシのような新参がいても大した知恵が出せませんので裏方に徹させていただきます。では、失礼」

女性は無機質な棒読み口調でそれだけ言う与会議室を後にした。

閉ざされた扉の向こうからは女性に対する陰口と「どうするどうする」の堂々巡りが聞こえてくる。

（馬鹿だ、全く、馬鹿ばっかりだ）

この街『スネイル』の統制は確かにこの法務官がとってきた。でもそれは二十年も前のこと。今は騎士団、ギルドが台頭し、三つがならみ合うことよって統制はなっている。そう、老人

は思っている。

だが、違う。

騎士団とギルドがぶつかり合えば、法務はそれを止めることできない。法務の武力は圧倒的に他二勢力より劣っているのだ。

たぶん、騎士団は法務を塔とのパイプ役として認識しているだろう。現にそのとおりなのだが、その憶測が我等法務を生かしている。

だが、やるだろう、騎士団は。

魔人を手にした今。

均衡の破壊を。

「なら、やることは一つです」

ビルから出て、女性は車に乗り込んだ。

「デウス様、どこへ参りましょう？」

機械音声^{メカニカルボイス}がデウスに行き先を伺う。デウスは背もたれに身を預け、大きく息を吐き出しながら言った。

「羽々切邸^{ハヤハチ}」

「羽々切財閥ですね。了解いたしました」

エンジンがかかり、車が走り出す。

窓の外を見つめながら、デウスは小さくぼやいた。

「きな臭いオフ会になりそうデウス」



騎士団本部地下。

壁に張り付けられ、うなだれる神無はどこからか聞こえる足音に反応してゆつくりと目を開ける。

オートロックが開き、部屋に入る二人の女を確認した。

漆黒のロングヘアに射抜くような黒い目、小さな眼鏡を鼻にかけてスーツ姿のスレンダーな女性。もう一人は黒く長い髪、人形のようなフリルのたくさん付いた黒い服、黒く澄んだ目に野心を映した少女。この二人である。二人は神無の前まで歩み寄ると好奇の目で神無を見上げた。

「これが魔人……ですわね？」

「ああ、こいつが、黒い魔人だ」

「こうやって見上げたまま話すんじゃない、話しづらいですわね？」

「好きにしろ。私が請け負った仕事は捕まえるまでだ」
少女が懐から取り出した遠隔操作装置のスイッチを押すと神無を縛り付けていた拘束が外れ、宙に投げ出された神無は階段を下りるように自然に床に着地した。

「この視線なら話しやすいですわね」

そういうと少女は薄く笑い神無に歩み寄り対峙する。

「はじめまして。わたくしは『羽々切アーシャ』、騎士団のスポンサーをさせていただいていますわ」

紹介を促すように、アーシャは女性に向かって微笑む。

「私は『空我』。騎士団の団長をしている」

神無は二人の顔を流すように見ると鼻で笑い、開口具を噛み砕いていく。

「べっ」

開口具を吐き捨てると部屋の間に向かって嘖り飛ばした。ひしゃげた開口具は闇の中に消え、静寂が訪れる。

「よろしくて？」

アーシャはそう言つて静寂をかき消すと話を始めた。

「魔人、いや、神無さん。貴方に話があり、ここにきていただきましたわ。招待の仕方が乱暴だったことは詫びなきやいけませんわね」

「そんなことはどうだっていい。なんの用だ？」

「簡単ですわ。貴方に協力を願いたい。この世界を、変えるために」

「興味ないな」

神無はそう即答すると、意識を切った。すぐさま、イオが倒れゆく身体を支え、立ち上がる。

「ふふ、どうも、神無は話す気分じゃないらしい。ここからは、僕が話を聞くよ」

「貴方は、イオ、でしたわね」

「良く、知っているようだね？ 君は、何者だい？」

「ただの、お嬢様ですわ」

アーシャはそう言つて微笑む。

「アーシャ！ 私はもう、行くぞ」

痺れを切らしたように空我はそういうとイオを睨み吐き捨てる。

「魔人など必要ない。世界は変える、私を変えない」

それだけ言うと、空我は部屋を後にした。

部屋を出た空我はまっすぐ通路を歩く。その先から一人の女性が歩いてきた。青い髪、緑色の眼、作ったように整った顔、澄ました顔の女性は乱れることない歩みで接近し、空我とすれ違う。その一瞬、甘い匂いがした。

空我はその場で立ち止まり、小さくキリツサを呼んだ。通路の闇からキリツサが音も無く現れる。

真つ白い髪に開いているのかわからないほどの細い目。前を開けたジージャンとタイトなジーンズに黒いシャツ、大きなトランクを持った女性が空我の前に現れた。

「なんスか？」

「仕事だ」

薄明かりの中、イオとアーシヤは対峙する。

「国崩し……ねえ」

「そう、今から起こす大混乱の、布石ですわ」

「興味、ないな」

イオはそう言うのと懐から電子地図を取り出す。電源を入れてみるが、うんともすんとも言わないその電子地図に苛立ちを感じながらまた懐にしまった。

自動扉が開き、一人の女性が部屋に入ってきた。

「デウスさん」

アーシヤがそう呼ぶデウスは真つ直ぐアーシヤに歩み寄ると機械的に微笑み、深く礼をした。

「ご機嫌麗しゅう、姫」

「その姫というの、やめていただけませんか？」

「仰せのままに」

無機質な機械口調でそう言うのと懐から一枚の記録チップを取り出した。

「国崩し、その鍵デス。見せてくだサイ。新たな国崩しヲ」

アーシヤがそれを受け取るとデウスは微かに笑い、視線をイオに移した。

「あなたが、イオ」

そう呟くとイオに歩み寄り、右手でイオの頬を撫でた。

「バーフェクト、王デス」

デウスはそういうと口角を歪めて笑い、アーシヤの方へ振り返る。

「エンジンがあつたまりすぎまシタ。ここらへんでお暇いただきマス。では、姫に幸多からんことヲ」

それだけ言うとデウスは部屋を後にした。

「これで、準備は整いましたわ」

記録チップを手に、アーシヤが呟く。

「あとは、あなたが協力するかどうか、それ次第ですわ」

「僕は……」

断る、そう思つて口を開いた瞬間、何かが闇から投げつけられた。空中で掴むと、それはさつき蹴り飛ばしたはずの潰れた開口具だった。

「誰です？」

そうイオが闇に問いかけると、一人の女性が闇の中から姿を現した。灰色の長髪に赤緑の眼、怪しげな雰囲気をもった女性。闇から現れ、アーシャの後ろに立つ。

「私の名前はドレッドノート、アーシャの、友人だよ」

ドレッドノートはそういうと口角を歪めて笑い、アーシャの持つている記録チップを奪う。

「イオ、だっけ？ 私たちについたほうが利口だと思うけど？」

「どうかな？」

「メリットを、詳しく説明して欲しいな」

イオがそう返すと、アーシャは記録チップをドレッドノートから奪い返しながら答える。

「ひとつは、そう、情報ですわ。貴方はここに来たばかりで何も知らない、そんな貴方に、情報を提供できますわ。二つ目は、貴方の目的、塔。今、塔は法務の管轄にありますわ。国崩しを実行すればその管轄を奪えますわ。三つ目は、貴方の安全を保証できますわ。騎士団もドレッドノートも魔人殺しの経験はありませんのよ」

「僕も、殺せるってこと？」

殺気が溢れ、鉄がざわめき立つ。

「たとえばの話ですわ」

アーシャは軽く流し、手を差し出す。

「助けて下さいませんか？ 弱い人間たちを、貴方の、その腕で」

見下してるのだから、見上げているのだがわからないその行為を鼻で笑い、イオはその手を取った。



カンツカンツカンツカンツ！

軽快な音を立てながら、イオは吹き抜けの階段を上っていく。

(どういうつもりだ？)

聞いてくる神無にイオは静かに答えた。

「どうもこうもないよ。今は人間に協力する。いや、してもいいと思ってる」

(神威は嫌がると思うが)

「関係ないよ。二対一だ」

(俺はまだ賛成してないぞ)

「賛成するさ、これも全てアインと斐文の為だからね」

(斐文の？)

「ああ、この世界につくるんだよ、僕らの居場所を」

(……………)

「忌々しい天井を外し、塔なんてとっぽらって、この大地に僕らの生きる世界を作る」

(本気か?)

「勿論、本気だ。こんな狭いところじゃ、自由なんて言葉も使えない。だからとっぽらってフリーにしてやる、ま、それも人間の狙いだと思うがね」

(人間の狙い?)

「そう、地下だよ。感じるだろ、死の蠢きが。無教にひしめき合うリスカたちの慟哭が」

ビルが一番上にたどり着き、イオは薄く笑ったまま天蓋を見上げた。

「上でも下でも、呼んでいるんだ。人間を利用して下、自力で上。呼ぶ声の正体を見極めたい」

(アイン……か)

「ふっ、だが、僕は……」

アインを守れなかった。

崩れゆく床と浮遊感の中で、僕はずっと手を伸ばした。僕は、僕は！

そこでイオは異変に気付いた。

「……………声？」

(俺に変われ！)

神無は強引に身体の主導権を奪う。

「どこから聞こえる！」

(何故そんなに熱くなる。たかが歌だろ?)

「ああ、たかが歌だ。でも、これは、斐文の声だ！」

風に乗って聞こえる声に神無は心を乱し、闇雲に辺りを見渡す。目に入ったのはリスカが群がる廢ビル、その屋上に少女は立っていた。

「斐文っ！」

青い炎が走ったかと思うと神無は一瞬で黒い装甲を纏い、魔人となって跳んだ。少女が立っているのは三つ隣のビル、そこに向かった黒い魔人が駆ける。青い炎の足跡を残し、リスカを足蹴にして、派手な金属音と火花を散らしながら魔人はビルの先にたどり着いた。

「斐文！」

装甲を脱ぎ払い、神無は少女に駆け寄った。

少女は歌うことを止め、ゆっくり神無の方に向き直る。明かりの下で輪郭を得たその顔は、紛れも無く斐文、そのものだった。無表情な斐文は静かに口を開く。

「誰？」

興奮していた神無もこの問いに幾分冷静になったようだ。

「俺は、神無。君は？」

「私……私は、マキナ」

少女はそう答えると静かに歩きだした。

「どこに行くんだ？」

神無が聞くとマキナは静かに答える。

「歌の聞こえるところ。ここじゃ、なかったみたいだから」

寂しそうにそう答えると、マキナはゆっくりと歩き出す。周りを囲むリスカに目をくれることもなく、ゆっくりと。リスカはマキナを取り囲むようにひしめく。見守るような動きで、マキナに歩調を合わせながら、マキナとリスカの群れは闇に溶けるように消えていった。

その後ろ姿を見送りながら神無は考える。

（マキナは何かを求めている……それが何かはわからない、だが、容易な捜し物ではないことは想像できる。俺に……）

そこまで考えたところでストップがかかった。

（神無、君はマキナをどうするつもりかい？）

「イオ」

（彼女に斐文の影を感じたからといって容易に首を突っ込むのは、どうかな？）

「わかってる」

（彼女は斐文のかわりには……）

「わかってる！」

静寂を振り払うように神無が吠える。その瞬間、神無とイオは入れ替わった。

「全く、僕らの目的を忘れてもらっては困るんだけどな」



三日後。

法務局の前には鉄格子で覆われた搬送車とそれを取り巻く騎士団の連中が仰々しく列を作っていた。

「ふう」

鉄格子から見える殺風景な景色にイオは小さくため息をつく。

「退屈か？ 魔人」

隣に腰かけている空我が不機嫌そうに問いかけてきた。

「退屈というより、窮屈かな。1サイズ上の拘束着が良かったね。この手錠も趣味が悪いし、シルバー一色じゃ無骨過ぎて全身に絡まった鎖とよく合わないよ」

「よくしゃべる」

「口しか動かすところがないものでね」

「すぐに自由にしてやる、それまで飴でも舐めるか？」

そう言って空我はポケットから苺味のキャンデーを取り出した。

「有難く頂くよ」

手錠をかけられた手で器用に梱包紙を剥がし、飴玉を口に投げ込んだ。

「アーシャがいないみたいだけど？」

「あいつは別働隊だ、正面からは私とお前で行く。いいか、あくまで私達は魔人であるお前を捕まえた、その譲与に来たって名目だから」

「ああ、わかっている」

「ああ、わかっている」

法務ってのがなんなのか気になるしな、まあ、おとなしくしてやる。

そんなやりとりをしているうちに車は止まり、ドアが開け放たれた。

「さあ、行くぞ」

イオは空我と共に立ち上がり、ゆっくりと車から降りた。そして、目の前にそびえる法務ビルを見上げ、薄く笑った。

二十五階建てのビルの一室。

その前で空我は声を上げる。

「騎士団団長、空我。魔人を連れてきました！」

そこまで言うとき空我は信じられない行動に出る。

そう、目の前のドアを蹴り破ったのだ。

中には十から二十人ほどの身なりのいい老人が円卓の席に座り、驚いた表情でこちらを見ている。

一瞬だった。

「どもっス」

天井から舞い降りてきた糸目の女性がそういったと同時に座っていた老人の眉間にまたたく間に槍が突き刺さった。

会議室から音は消え、残ったのは壁に張り付けられた老人たちのオブジェだった。壁紙は血でまばらに染まり、一瞬で模様替えが終わったようになってしまった。

「完了」

空我はそう言うとき死体を踏みつけながら奥の席にゆき、倒れ

込むように座った。

「魔人、もう帰っていいぞ。ここからは私たちの仕事だ」

「僕の仕事は、通過のための鍵みたいなものだったのか」

「そうだ、魔人がいなきゃ、このビルには入れない。協力感謝する」

「じゃ、アーシヤによろしく」

体中の鎖を引きちぎり、身体を自由にするとイオは踵を返した。その後ろ姿に空我は話しかける。

「ギルドの連中にあつたら伝えてくれ。国崩しは成ったと」

「あつたらな」

イオは笑ってそういうとエレベーターに乗り込みその場を後にした。

（法務……まさか、ふふふ、これはこれは）

小さく笑いを堪えながらイオは法務ビルを後にした。

どれぐらい歩いただろうか。

（全く、本当に、面白いな）

ギルドの連中とにらみ合いながらイオはそう思った。鉄の靴を履いた男、大鎌を携えたフリル服の少女、なんとも、へんてこな組み合わせだな。

「お前の面、覚えてるぞ。黒い、魔人だな」

鉄の靴を履いた男は距離を保ちながらそう言った。

「イカした靴ですね。ステップ、踏めますか？」

殺気だった次の瞬間、ギルドが動いた。
 薙ぎ払われる鋼鉄の蹴り、降り下ろされる大鎌。挟み込むよ
 うな猛襲がイオに襲いかかる。

「っ！」

イオは両手を魔人化させると襲い来る蹴りと鎌を受け止めた。

「君たち、ギルドだよな」

「言葉がわかるのか？ 魔人」

どうやら、ギルドの間は騎士団の間より魔人というものをよく知らないようだ。こいつらに、学ぶべきことはないな。

「騎士団から伝言。『国崩しは成った』以上」

「は？」

イオの言葉に鉄の靴男は困惑の声を漏らす。

「法務ビルだ」

そこまで言うと、鉄の靴男の顔色が変わった。

「空我の奴……まさか……、ねくら！ 大至急法務ビルに向かう！」

「ええええ。魔人は？」

「それよりやばいことが起きてんだよ！ 行くぞ！」

「りょーかい」

どういうことか、伝言した途端、ギルドはざわめきだし、こちらを気にすることもなく大急ぎで法務ビルに向かって走っていった。

「これが狙い……だったのか、ふふ」

薄く笑いを浮かべるとイオは明かりが煌々と灯る街の方へ歩いていった。



「ふっざけんな！」

ギルド長『ガイア』は走りながら悪態をついた。怒りが無意識の内に口から溢れてくる状況、それにこれは、焦りか？

「クソッ！ 何もかもだ！」

併走するゴスロリアクションの少女『ねくら』は冷めた目でそれを見つめると不機嫌そうに話しかける。

「この目的は？」

その問いにガイアは乱暴に答える。

「阻止だ！ 国崩しの！」

「何？ その国崩しって？」

「あ？ ……とてつもなくやばいことだよ」

「ふん」

そんな話をしていっているうちに法務ビルが見える位置までたどり着いた。

「誰もいないよ。騎士団の間も法務の間も」

「んなことどうでもいい、突っ込む！」

「はいはい」

気のない返事をしながら軽く手を振って併走していたねくら

が突如、視界から消える。

「くっ！」

振り向くとそこには赤い服を着た不気味な気配の女が靴片手に突っ立っていた。吹っ飛ばされたのか、ねくらはその後方で顔を抑えて座り込んでいた。赤い服を着た糸目の女は振り返ると不気味に微笑む。

「色男く団長が待つてるっすよ〜」

「お前……騎士団か？」

「当たりのハズレ。あちしと問答するより、早く行った方がいいんじゃないっすか？ 始まるっすよ？ 国崩し」

「くっ！ ねくら！ 先に行ってるぞ！」

ガイアはそう叫ぶと踵を返し、法務ビルに入ってしまった。

「りようかい。まあ、ぼちぼち行きますわ」

鼻を押さえてねくらが立ち上がる。

「さて、騎士団さん、鼻に膝入れたお礼、させてもらわなきやね」

「お釣りは結構なんすけどねえ」

後ろの話し声を振り切り、ガイアは一直線に上を目指して階段を駆け上がる。

このビルには何度か来たことがある。

この街で物事を通すには必ず通らなければならない場所、法を司る場所、それがここ、法務ビルだ。

だから分かる。

空我がいるとしたらあそこしかない。

4階会議室、法務官全員が集まる場所、通称『ラウンズ』。

「空・我っ！」

走った助走と共に飛び、その力でガイアは重厚な扉を蹴り破った。

「ノックにしては、少々乱暴じゃないか？ ええ、ガイア？」

「俺は丁寧過ぎると思っただがね」

扉が開け放たれたそこは、鉄の臭いで満ち溢れていた。

赤く彩られた壁紙、席にもたれ絶命した老人たち、槍によつて昆虫標本のように壁に貼り付けになっている警備員たち。

何が起こったのか、一目でわかる有様にガイアの憤りは最高潮に達した。

「殺風景な部屋を、センス良くアレンジしやがったじゃねえか。ここでなら、冷静に、話し合えそうだぜ！」

感情を爆発させるように怒号を上げると、目の前の円卓を右足で勢いよく蹴り上げた。ビスにより強固に床に固定されていた円卓がまるでちやぶ台返しをされたかのように宙を舞い、空

我の眼前に襲いかかる。空我はそれを片手で振り払い、払われた円卓はその勢いそのまま壁に突き刺さった。

「相変わらず短気だな、ガイア。そんなんじゃ話し合いもできない」

「言い訳なんぞ聞きたくねえ。てめえの企みぶつ潰してしまいにしやる！」

「……………ガキだな」

空我は座っていた椅子から立ち上がると眼鏡を人差し指で上げ、身体に殺気を巡らせるべく、ゆっくりと静かに息を吐く。

「では、話し合いだ、ガイア。一方的に話させてもらうがな」

「こつちも、そのつもりだ！」

二人は一気に距離を詰めると拳と蹴りをお互いに放った。

—— 同時刻。

イオは人にまぎれて薄闇がかかった街中を歩いていた。

(鬱陶しい……やはり人間は……)

ふと、声が聞こえた。

この声は、そう思ったところで神無が強引に身体の主導権を

奪い取った。

「マキナだ」

(またそれか)

うんざりといったイオの言葉を無視し、神無は雑踏の中から

マキナを探す。

雑踏の外れ、寂れかかった路地に差し掛かる死に損ないの街

灯の下で歌うマキナを見つけた。不思議とそのそばに人はいな

い。まるで、見えても聞こえてもいないかのように人の波はそ

の前をすり抜けていく。

「マキナ」

神無は声をかけると人を縫って近づいた。

「神無」

マキナは神無に気づき、歌を止めた。

「今日はギャラリーがいないんだな」

「ここは、街中だから。皆はこれない」

「そうか」

言葉はとぎれとぎれでつながらない。ただ、目の前を通りゆく

沢山の人たちを見ていた。

「……歌さがし、俺にも手伝えることはないか？」

沈黙を破り、吐き出したその言葉にマキナは小さく微笑んだ。

「ありがとう。でも、メロディーも歌詞も頭の中にしかないか

ら」

「そうか、じゃあ、何かして欲しいことはないか？ なんでも

いい、何かしたいんだ」

神無がそう言うときマキナは一瞬困った顔をし、一つのビルを

指差した。

「あそこに入れるようにして欲しい」

高いビル。

そう、あそこは。

法務ビル。

「わかった」

神無はそう言うとき薄く笑った。

「また、歌を聴きに来るよ。ギャラリーがいないときにな」

そう言うとき神無は雑踏に飛び込んだ。

どうやら、俺も騎士団つてやつを利用してなきやならないよう
だ。

そんなことを考えていると珍しく神威が声をかけてきた。

(二股か？ 色男)

「違う、人助けだ」

(ははっ、それこそ違うだろ?)

「なに？」

(人助けじゃねえ、自己満足、そうだろ?)

「だったら、なんだって言うんだ！」

(はっ、簡単なことさ。誰かの為なんて言葉は使うな。お前の
為に動け。じゃなきや、また土壇場で、ブレるぞ)

その言葉に、神無は押し黙った。

その無言の中、パイプにした携帯だけがこもったモーター音
を唸らせていた。



「あちしと、同盟を組まないかい？」

法務ビルの前、不機嫌そうに戦闘態勢を取るゴスロリ服の少
女ねくらに赤い服を着たキリツサはそう切り出した。

「は？」

当然そう答える。

片方は騎士団、片方はギルドの構成員、現状は敵同士で動い

ている。その二つの組織内で休戦を通り越して同盟だ、いかれ
ているとしか思えない。

「君はギルド側にいる人間じゃないっす。守るより壊したい方
つすよね。調べたからよくわかってるっすよ」

「で？ 同盟を組んで、どうしたいの？」

その問いに、キリツサは嬉々として答える。

「あちしは近い将来裏切るっす。もお、ここぞというタイミン
グでクリティカルに。騎士団もギルドもパニックになるっす。
そうなったときに、あちしにつかない？ って話っすよ」

「……バカバカしい、興が削がれた」

ねくらはそう言うのと地面に座り込んだ。

「で、突っぱねたわけだけど、殺す？」

そう聞くと、キリツサは嬉々として答える。

「殺さないっすよ。今はその時じゃないし、君と今やると疲れ
るから嫌っす。それに」

「それに？」

「君は必ずあちし側に付くっす。あちしと、世界を変える側に」
笑いながら話すキリツサを見てねくらはため息をついた。

確かに付くかもね。

今は、退屈だし。

——法務ビル4階。

「たお、れる！」

ガイア渾身の飛び蹴りが、空我の顔面に突き刺さる。が、空我の足元は微動だにせず、ガイアは空我の顔を蹴り後ろに舞い戻った。

壁はそこらじゅうに亀裂が走り、机は粉々に砕け、ガラス窓もほとんどが失われていた。

立っている二人も満身創痍の体で荒い息をつきながら威圧するように睨み合っている。

「もう、いいだろう。倒れるよ、空我！」

そう叫ぶとガイアは床を蹴って宙を舞い、遠心力を利用した回転蹴りで空我の首を薙ぎ払う。だが、空我は倒れない。

「私は、倒れないぞ」

そういうと空我は拳を握る。

必殺の一撃。

空我の技でも気を込めた正拳突き。

震脚から繰り出す必殺の一撃なのだが、ここでは使えない。そう、なぜなら。

空我はガイアに向かい震脚を繰り出す。踏みしめたその足は床を砕き、沼に沈むような感覚で足首まで床に埋まった。

「わかっていることだろうが！」

ガイアは叫び、バランスを崩した空我の顎を膝で捉え、蹴り上げる。

「いい加減、倒れる！」

仰け反る空我の胸に前蹴りを叩き込む。

「……………倒れんさ」

蹴りを胸に受けた状態で空我はそこに留まった。

「くっ」

ガイアは距離を取り、空我とにらみ合う。

「お前、止まりたいんじゃないのか？」

ガイアの問いに空我は静かに笑う。

「魔人の情報を直接俺に流し、その魔人からの託^{たく}けで法務ビルに呼ぶ、さらに国崩しをちらつかせて俺を挑発、戦う流れにしたんだろ。こんな、自分に不利な場所で。止めて欲しかったんじゃないのか？」

「……………ふふ、そうだな。最初はそのつもりだったよ。国崩し、やっていい訳がない。だが、違った。お前と話して私は確信したよ。やはり私は間違っていないとな！」

埋まった片足を引き抜き、空我は再度正拳突きの構えを取る。

「ひっくり返す。不拔けたお前も、生きているだけの民衆も、空を覆う蓋も、見下ろす塔も、全てを！」

「させるか！ 今日も明日も明後日も、絶対何も変えない、変えさせない！ お前らの身勝手な理由で日常を壊させてたまるか！」

二人とも次の一撃の為の構えを取り、緊張の弓を引き絞っていく。

こいつで終わりだ。

二人はそう考えていた。

そして、糸が切れる。

「っ！」

「しっ！」

踏み締めた震脚で床が沈み、空我を中心に沈下していく。ガイアは宙を舞い、渾身の蹴りを空我に向けて振り下ろした。迎撃の拳と振り降ろした蹴り、双方があいまみえることはなかった。

「やめろ」

闇のように静かな声が響いたかと思うと、ガイアは瞬時に後方の壁に叩きつけられた。

「ダメっすよお。団長」

空我の肩に手を置き、キリツサはけらけらと笑う。

ガイアをはじめ飛びし着地した男、そいつは紛れも無くイオ本人だった。

「お前」

イオは空我の方を見るとため息をつき、大声で叫んだ。

「来てやったぞ！ 要件はなんだ!？」

その声に反応し、がたついた扉が倒れる。その奥に立っていたのは書類を小脇に抱えた羽々切アーシャだった。

「ご足労、ご苦労様ですわ」

アーシャはまっすぐ部屋に入ってくると部屋を見渡し、大きくため息をついた。

「せっかく無傷で手に入れましたのに、これじゃ、会議もでき

ませんわ。そう思いませんか？ ガイア」

倒れるガイアを見下ろし、そう問いかける。

「会議……だと……？」

「そう、この街の未来を話し合う。重要な会議ですわ。当然、ギルド長の貴方には出ていただきますわよ」

「この状況でぬけぬけと……」

「貴方と団長との小競り合いは未来には関係ありませんわ。勿論二人の間にある遺恨もね。さあ、テーブルについて下さいませ。この街、イカロスの改善案を提出いたしますわ」



簡易的に作った会議室に怒声が響く。

「なんだこれは！」

机を叩き、ガイアが勢いよく椅子から立ち上がった。

「なんでも何も、それが現状ですわ」

「現状？ 機械に支配されていた、その上、塔の人間がこの街を支配、監視していただと。そんなこと信じられるか！」

「信じなくてもいいですわ。でも、これは現実、現に処分した法務官は全員アンドロイドでしたわ。その上塔との交信履歴も山ほど出てきましたわ」

「っーことは、何か。俺たちは塔のいいように管理統制されていたってことか？」

「ええ、そして今もそうされていますわ」

「ふざけやがって」

「言っても仕方ないことですね。それに、それはもう終わったこと、国崩しを次のステップに移しますわ」

「その国崩しってのをやめろ」

「言葉が気になりますの？」

「ああ、十五年前のものと違おうと頭じゃわかっているんだがな」
「そう言ってガイアは勢いよく腰を下ろす。」

この場にいるのは六人。

騎士団団長空我を始め、取り仕切るアーシャ、団員（仮）キリッサ、ギルド長ガイア、ギルド員ねくら、そして、魔人神無。

六人は円卓を囲み、息を殺しにらみ合っていた。

「国崩し、貴様を釣るには最も効果的な言葉だったよ」

「あ？」

「他の作戦コードだったらお前は魔人を優先し、こっちは見向きもしなかっただろう」

「だからといって過度に挑発して殴り合う必要はあったのかしら？」

「あったよ、やっとこ帰ってきたと思ったらグローブつけてテコンドーの真似事をしていたんだ。我慢ならん」

「淡々と話している空我の口調から滲み出る怒りの波長にアーシャはため息をついた。」

「ねえ、アーシャちゃん。私たちここにいる必要、ある？」

そう切り出したのはねくらだった。

この街『イカロス』の先を決める話し合いだ。正直、ギルドの使いっぱしりという身分の自分はかなりこの場は居心地が悪いのだろう。たちと言ったのはキリッサも居心地が悪そうだったからだ。

「ありますわ。あなたたちも同じ事を成す、共犯者ですもの」

「まるで犯罪者扱い」

「革命を起こそうってものは大体そんなもんですわ。結果がわたくしたちを大英雄か極悪犯かに決めますの」

「結果……ね」

「そう、結果ですわ」

そこまで言うとアーシャはテーブルに巻物型の電子地図を広げた。緑の線が走り、立体的に図面を描いていく、そう、この形は。

「イカロスの地図か」

「そう、この街の全容ですわ……でも、わたくしたちが注目すべきは、ここ」

アーシャはそう言って地下を指差す。

「地下……法務の管轄か」

「そう、ここにありますの。リスカを停止させ、外の砂嵐を止める方法が」

その言葉で会議室の空気が変わった。

「馬鹿言うなよ、アーシャ。外に世界なんかねえ」

そう切り出したのはガイアだった。

「外は死の国だ。出たものは誰一人として帰ってこない。見渡す限り砂、その上リスカ、生きる場所なんてどこにもねえ。そうだろう？」

「そうですね。今まではね」

「これからもだ！」

「決め付けるのはやめてくださいまし。未来は常に変わるものですわ」

「そうアーシャは冷静にガイアをなだめる。

「それより、本題に入ってくれないか」

「痺れを切らし、イオはアーシャに急かすように言った。

「そうですね。ではプロジェクト国崩し、いや、この名前はどう使わないほうがいいですわね」

「一瞬ガイアの空気が張り詰めたのを見逃さず、アーシャは少し考えた。

「プロジェクト『Sun Seeker』で、行きますわ。このプロジェクトの最終目標は塔の支配からの開放、そのためにまず」

立体地図をスクロールさせ、地下の区画を指でなぞる。

「ここ、この稼働中の区画を停止させますわ」

「？　そこに何がある？」

ガイアが怪訝そうな顔を見ると、アーシャは話し始めた。

「ここにはリスカのマザーにして天蓋の構成、砂嵐の制御を行

う機械の神『デウス・エクス・マキナ』がいますわ」

「なぜそんなことが……」

「分かりますわ。わたくしは半生をかけて法務と塔の繋がり、機械が暴走する謎、地下に眠る機械神、様々な裏側を調べさせていただきましたもの」

怪しく微笑み、アーシャは区画に電子マーカーで色を付けた。

「デウス・エクス・マキナの停止、できなければ破壊がこの作戦の最大の肝ですわ」

「やることはそれだけ？」

「今はそれだけで結構ですわ」

自信に満ちたアーシャの返答に、聞いたねくらは小さく頭を縦に振った。

「騎士団はもちろん、ギルドも、やっていただけますわよね？」

「アーシャがそう聞くとガイアは小さく唸り、口を開く。

「地下に突入するのは俺とねくらだけだ。ギルドは戦闘集団じゃない。戦闘をするのなら俺たちしか人員は出せん」

「それで結構ですわ」

ガイアにそう返すと、アーシャはイオに向き合った。

「来て、いただけますわよね？」

「ああ、問題……」

「そこまで言いかけて、イオと神無は入れ替わった。

(なんのつもりだ、神無！)

慌てるイオを無視し、神無は重く口を開いた。

「一つ、条件がある」

その言葉にアーシャの笑顔が凍りつく。

「？ 条件？」

「法務ビルを、開放しろ」

その言葉に、会議室は一気に殺気立った。

「おっしゃりたいことが、わかりませんわねえ」

「一人、入りたい奴がいる」

「ちよいちよい、魔人君。ここはあちし達としても重要な場所

なんスよ？ そこに部外者を入れるなんて……」

説得に入ろうとするキリツサに神無ははつきりと言った。

「嫌なら俺はこの作戦には参加しない。それどころか、お前ら

が突入したと同時に法務ビルを襲撃する」

その言葉にその場にいた全員が席を立つ。

「待ちなさい」

動こうとする全員を片手で制し、アーシャは薄く笑いながら

口を開いた。

「いいですわ。その条件、飲みますわ」

「感謝する」

短く札を交わすと神無は席を立つ。

「さて、話は決まりましたわ。決行は二日後、集合場所は法務

ビル前。名残は二日以内に処分してくださいませ」

挨拶を最後まで聞くこともなく、神無は部屋を出た。

（結果的には変わらなかったが、僕の作戦を潰す気か？ 神無）

「そんなつもりはないさ。ただ」

（ただ？）

「俺は俺なりに動く。そういうことだ」

神無は部屋から出たその足で、明かりの尽きることはない街

へと向かった。

歌が聞こえる。

マキナ、俺は、助ける。

「待て！」

声をかけられ、神無は立ち止まる。

後ろから走ってきた男、ギルドの長ガイアは荒い息をつきな

がら神無に尋ねる。

「ヤハヴェという男を知っているな？」

「ああ」

忘れるはずもない。

神無が一番初めに目にした戦士だ。

勇敢だが、愚かな戦士だ。

息を落ち着かせながら、ガイアは静かに神無に問いかける。

「ヤハヴェは……死んだか？」

「ああ」

「……そうか」

それだけ言うとガイアは大きく息を吐いた。

「それだけだ。二日後、頼むぞ」

「言われなくても」

短く言葉を交わし、神無とガイアは別れた。

ヤハヴェ……か。

何故か酷く哀愁に駆られた。



人払いをしたのか、法務ビル周辺は猫の子一匹いない、さながらゴーストタウンのようになっていた。

突入組は騎士団長空我をはじめ、団員キリツサ、ギルド長ガイア、ギルド員ねくら、そして、魔人神無の五人である。

外での警備&サポート組は騎士団員アーシャをはじめ、団員ゼクス、ギルド員ビートの三名で行う。

突入組は指示を受けるため、耳にインカムをはめ、法務ビルの前で待機していた。

『あ、あ、聞こえます？』

インカムから雑音混じりの音声聞こえる。

『今からゲートを開きますわ。開いたら即突入してくださいまし』

その言葉の途中から地面が揺れだし、石畳がロジックのように動き、口を開けていく。

『標的はデウス・エクス・マキナ、なるべく生け捕りをお願いしますわ』

『停止じゃないのか？ まるで生きているような言い方だな』

ガイアはぼやきながら口を開けた地面に向かって跳ぶ。

「……」

空我は押し黙り、思い詰めたような表情で飛び降りる。

「さて、お仕事お仕事っス」

「行くかな」

キリツサ、ねくらと順番に穴に落ちていく。

神無は穴を見下ろし耳を澄ませる。

（聞こえるな）

「ああ」

イオも感じ取っている。

（この奥に、俺たちを呼ぶ声の主がいる。

上と下からステレオで響く呼び声、これは確かにアインの声。

アインは塔にいる。

なら、下から僕を呼ぶこいつは、誰だ？）

「確かめに行くぞ」

神無はそう呟くと、穴に飛び降りた。

二秒ばかりの浮遊感を味わい、鉄の床に舞い降りる。周りは暗く、石畳に空いた口から差し込む光だけがこの闇の一角を照らしていた。

周りには誰もいない。

どうやら、飛び込んだ時に一人一人にばらされたようだ。

（この地下通路、既にデウス・エクス・マキナってやつお腹の中ってことか？）

頭上の口が締めまり、辺りは闇に包まれる。

『あ、あ、大丈夫ですか、イオ』

インカムからアーシャの声が聞こえる。

「問題ない、あと、俺は神無だ」

『失礼。神無、今明かりをつけますわ』

言うが早いか通路上部についた蛍光灯が手前から順番に灯り、先の闇を照らしていく。

「他の奴らはどうなった？」

『パラバラにはなっておりますが、各々デウス・エクス・マキナに向かって進んでおりますわ』

「そうか、じゃあ、俺も向かうとする」

神無はそう言って歩き出した。

『ご武運をですわ』

ノイズが混じり、声は聞こえなくなった。

暫く歩くと目の前に扉が現れた。

取っ手のない奇妙な扉で横に逆三角形のスイッチがこれみよがしに置いてある。

神無は躊躇うことなくそのスイッチを押した。すると奇妙な扉は開き、中は人が少数乗れるだけのスペースになっていた。

(乗れて、ことか)

神無はそう理解し、奇妙な箱の中に入った。

扉が閉まると謎の浮遊感を覚えた。何かにぶつかるような衝撃と共に部屋は止まると、ゆっくりと扉が開け放たれた。

一歩出ると、そこは開けた部屋だということが分かった。見回しても壁は見えず、天井も高い、この作り、まるで。

「大広間、だな」

(誰かいるぞ)

神威からの呼び掛けで、神無は気を引き締める。目を凝らすと、闇の向こうから何者が歩いてくるのが見える。

「……この感じは」

馬鹿な。そうは思ったが目の前にいる現実に神無はその存在を信じざるを得なかった。

垂れ下がる長い前髪、迷彩柄のバンダナ、そして、射殺すような鋭く黒い瞳。忘れるはずがない、この顔を。

「……ヤハヴェ」

「久しぶりだな、神無」

片手に二股の剣を持ち、ヤハヴェは寂しそうに笑う。

「終わりは近い。だから、俺はお前に選択を迫らなければならぬ。なあ、神無。世界を壊す気はあるか？」

「何を言うかと思えば、バカバカしい。そんな戯言を言うために墓穴から舞い戻ったのか？」

「戯言、そう、戯言だ。今はな」

進もうとする神無の前に立ちふさがり、ヤハヴェは剣を抜いた。

「聞き方が悪かったな。こう聞けばよかった。お前に世界を壊

す勇氣はあるか？」

「バカバカしいと言っているだろうが！」

ヤハヴェエの言葉を一蹴すると、神無は青い炎を纏い、魔人へと変身した。走り出した加速で地面を蹴り、跨ぐような形で宙を舞い、ヤハヴェエを飛び越す。

「話は、終わってないぞ」

その言葉と共に、一瞬空間がずれる。

「！」

神無はそれを察知し、身体を傾けると光が右腕を通り、右腕は身体から切り飛ばされる。咄嗟にそれを左手でつかみ、体勢を崩した状態で地面に落とされた。

「お前は世界を壊す、このスネイルを。どんな形であれ。今は成り行きでその片棒をかががされているのはわかる。だが、これが終わつたあと、お前は塔に上るんだろ？」

淡々と語りながら、ヤハヴェエは神無との距離を詰める。神無は切れた片腕を傷口に押し付け、元通りにつなげると、動く機会を窺う。

（神無、あいつは敵だ。殺さないと）

イオが緊迫した口調で言う。

わかっている。だが、俺は。

「塔は一人でしか登れない。今のお前じゃ、無理だ！」

ヤハヴェエが駆け出し、一気に距離が詰まる。薙ぎ払う剣を紙一重で躰し、よろつきながら後ろに逃げる。

（俺に替われ！）

「っ！」

思考をジャックされ、身体の優先権を神威に奪われる。
「好き勝手、やってくれるじゃねえか！」

降り下ろされる剣を左手ではじき、身体を翻して神威はヤハヴェエに襲いかかる。が、それはすぐに阻止された。

「ぐっ……てめえ」

二又剣から煙が上がり、その剣の指す先には直径十センチほどの丸い穴がぽっかりと空いている。そして、壁と剣の間にいた神威の身体にも十センチほどの穴が口を開けていた。

「お前じゃねえ」

ヤハヴェエはそういうと剣をたたみ、振り上げる。

（交代だ）

降り下ろされる剣を躰し、イオは小さく呟く。

「Paradise LOST」

魔人の右腕が展開し、白い炎が逆る。

「イオ、か……お前でも、ねえ」

襲いかかる必殺の一撃を、ヤハヴェエは軽々と躰し、その動きから流れるような剣捌ぎでイオの胸を切つて抜けた。

「くっ！」

「俺にやらせろ！」

展開した右腕から黒い炎が迸り、怒りのままに神威が立ち上がる。

「死んで終われ！」

「出てくるな、俺は神無に話がある」

拳を振り上げ、突進する神威をヤハヴェエは構えも取らずに迎え撃つ。

そう、一瞬。

突き出す拳を躲し、カウンターで胴を薙ぐ、さらに振り返り、炎が迸る右腕を切り飛ばした。

「ちっ！」

切り離された右腕を左手でつかみ、傷口にくつつけながら逃げないように距離をとる。

(神威、下がれ)

「……うるせえ」

(僕がやる。交代だ)

「うるせえ！ つつてんだよ！」

一人で騒ぐ魔人を冷めた目で見つめながらヤハヴェエは小さく呟いた。

「黙れよ」

高速の突きが魔人の胸を貫く。

「何、見失ってんだよ、神無。お前はここにいるだろうが」

「ヤハヴェエ……」

剣を抜くと黒い炎は消え去り、魔人は静かに神無の姿に戻った。

「ヤハヴェエ、俺は」

「答え合わせだ」

「えっ？」

ヤハヴェエは剣を床に突き立て、真っ直ぐ神無を見つめる。

「手を開け。未来はいつもそんな中にある。さあ、答えを俺に示せ。そいつが最後の問いかけだ」

右手を開き、神無はゆつくりと目を閉じる。

(どうするの、神無？)

(決まってる、押し通るんだろ？)

頭の中で睨み合う三人。

疑問符を投げかける二人に、神無は両手を差し出した。

「塔には登る。だが、一人じゃ行かない。一人じゃなきや登れないなら、一人になる」

その言葉に神威は笑った。

(いいぜ、力を貸してやる)

そう言うど神無の右手を掴み、身体の主導権を奪った。

「ミックス！」

魔人に変わった右腕がヤハヴェエの胸を貫いた。

「……二十点。赤点だよ、馬鹿」

そう言いながら、ヤハヴェエは笑う。

「この問いに正解はねえ。だが、お前の答えが外れているってのだけははっきりしてんだ。でも、それでいい」

右腕を引き抜くとヤハヴェエは黒い炎に包まれる。燃えていく中、ヤハヴェエは笑う。

「何でもそうだ、正解なんてねえ。○×付けられる道じゃ、つまんねえだろ？　なあ、トウエルブ、俺はよくやったと思うぜ？　イレブン、先に行ってる」

灰になり、崩れるヤハヴェに、神無は言葉を詰まらせた。

「ヤハヴェ……」

「違う、俺は、サーティーンだ」

黒い炎は消え去り、灰となったヤハヴェは崩れ落ちた。



一方、地上では法務ビル付近に大きな掘っ建て小屋を立て、その中に機材を押し込み、息を殺して地下部隊の動きを見守っていた。

ココアの注がれたカップを傾け、一口飲み下し、アーシヤは言う。

「順調……かしら？」

迷走しながら動く五つのマーカー、一つは謎のマーカーと対峙し、L O S T。いや、正確には隠れたといったほうがいい。

他の四つは二つに分かれ、同じ方向に進んでいる。

「まあ、順調、ですわね」

自分に言い聞かせるようにつぶやくと法務ビル付近用のマップに目を移す。

？

すぐに異変に気付いた。

磁場の変化か？　マーカーもない歪んだ影が道をまっすぐ進み、法務ビルを目指している。考えながらマップを眺めていると表にいたゼクスが部屋に転がり込んできた。

「アーシヤ！　リスカだ！　リスカの大群が来たぞ！」

アーシヤはゼクスの方を見ないで返答する。

「問題ありませんわ。あれは客人。丁寧に通してくださいませ」

「は？」

「神無の客人がリスカの中にいますわ。引き止め無用。通しなさい、ですわ」

その言葉に納得できない様子のゼクスは部屋の隅にある椅子に座り込んだ。

ゼクスを無視し、アーシヤは画面を切り替える。無数に映る法務ビル外の画像にリスカの大群を見つけた。そこをズームしていくと、その群れの中心に一人の女性がいた。

こいつは……………。

「斐文」

「歌姫」

つぶやく隣の声に目を向けると、そこにはビートが立っていた。

「なぜ歌姫がここに？」

「神無の客人ですわ。理由は、知りませんわ」

「そうか……確かに、ここじゃ、歌ってないもんね」

ブツブツ言いながら考え込むビートにアーシヤは問いかける。

「で、なんですか？ その歌姫ってのは」

「歌姫、あの女性の通り名さ。人知れず現れて歌を紡ぎ消えていく。名前も所属も誰も知らない。全く謎の、歌うたいさ」

「そう、じゃあ、今日はここでライブでもするのかしら」

「もしそうなら、ここで最後だ」

「最後？」

「歌姫はスネイルの全てで歌っている。でも、ここだけでは歌っていない。だから、ここで最後だ」

「そう」

歌姫が率いるリスカの大軍を見つめ、アーシヤはため息をついた。

エレベーターは一階、二階、三階と上り、止まったと同時に扉が開かれる。目の前に広がる砕けた部屋はよく目にした廃墟と似ている。マキナは瓦礫の上を歩き、砕けた窓まで一直線に歩く。その周りをリスカが蠢き、ひしめき合う。

一匹のリスカは口からコードを取り出し、ビルのコンセントに接続して回る。もう一匹は胸の装甲をこじ開けると中からスピーカーを取り出した。ほかのリスカも照明、チューナー、音響器具等を取り出す。瓦礫の部屋はあつとという間に音楽スタジオへと姿を変えた。

砕けたガラスを踏みしめ、マキナは大きく開いた窓の前に立った。その後ろには楽器を構えた無数のリスカが並んでいた。

空を仰ぎ、マキナは大きく息を吸う。

「歌うよ、神無」

画面の向こうで歌う歌姫を見つめ、アーシヤは考えを巡らせる。

（斐文……歌姫……偶然つてことはありえませんが）

何か、裏がありますね。

このビルは私の籠、その中で歌う哀れなカナリヤのままいて下さるかしら？）

法務ビルを睨みながら一人の男が闇から現れる。顔に包帯を巻きつけた男、そう、×一だ。×一は法務ビルを見上げ、歯を軋ませる。

「人間の分際で」

「どうしたつてんだ？」

不意に声をかけられ、振り向くと、そこにはドレットノートが佇んでいた。

「貴様……」

×一は殺気を滾らせ、警戒するように身体を向き直す。放たれる殺気を風を受けるようにそよがせ、ドレットノートは笑う。

「なんだ、けつを拭きに来たか？ 四年前のつげの」

「ああ、そのとおりだ。失敗だよ、何もかも」

苦々しく返す×一にドレットノートは薄く笑ったあと、鋭く睨みつけた。

四年前。

砂嵐吹雪く天蓋の上、アーシヤとドレットノートは電子端末片手にある一箇所を指していた。

「この辺のはずですわ」

微弱な反応。それでも、アーシヤには確信があった。それは今朝のこと、過去の遺物として保管していた天蓋の強度を図る地震計にかすかなぶれがあったのだ。何かが落ちてきた、アーシヤはそう確信し、ドレットノートを連れてここに来た。

そして、彼女を見つけた。

そう、塔から落ちてきた、アインを。

「生きてますの？」

「いや、死んでる」

アインを囲み話していると一人の男が現れた。

顔中に巻かれた包帯をたなびかせた白い服の男はアーシヤに歩み寄り、威圧的な態度で言う。

「そいつをよこせ、人間」

「嫌ですわ」

アーシヤは男の言葉を突っぱねる。

「お前が持っても無意味なものだろう？」

「タダじゃ、あげませんと言ってるのですわ」

「そうか、じゃあ、取引をしよう」

メモリーチップを受け取り、アーシヤはアインを男に引き渡

した。

「やられましたわ」

メモリーチップを確認したアーシヤが苦笑いで漏らす。

「規格が違いますわ。再生できるデバイスを探しませんといけませんわね」

やることを見つけたアーシヤの目は生き生きと輝いていた。

「私も、失敗だと思っているよ。拾いになって、いかなきや良かったってね」

ドレットノートの殺気が周りの温度を下げるように張り詰め、木々に嫌な震えが走る。

「私はなあ、何も降ってこないことを祈っていたんだよ。何もなく、アーシヤと普通に暮らせることをなあ。それをてめえがぶち壊した。その罪は、重い」

殺気に気圧され、×一はカードを一枚取り出した。

「悪いが、とつととやらせてもらおう」

手首についたコネクタにカードを通すと、青い炎が燃え上がり、白い髪の毛の魔人が現れた。

「死ぬ」

青い炎を舞い上がらせ、×一は拳を振り上げる。繰り出された拳は青い炎をまとい、ドレットノートの顔を捉えた、ように見えた。

「舐めてんじゃ、ねえぞ」

×一の拳が振り払われ、かわりに黒い拳が×一の顔を捉えた。

突き出された黒い拳。それは黒い装甲を纏ったドレットノートの右腕だった。

「何……だと」

青い炎を揺らめかせ、ドレットノートが笑う。

「魔人が、自分だけだと思うなよ」

——同時刻、地下。

個室の扉が開き、ガイアは様子を探しながら箱の外に出た。

まさかエレベーターがあるとはな、そんなことをつぶやきながら辺を見回す。ここは地下何階だ？ 機械神には近いのか？ ほの暗い大広間を見回していると重低音がし、何かが降りてくるのを感じた。床を伝わる小さい振動でそれがエレベーターだと確信する。

扉が開かれ、中から出てきたのは騎士団長空我だった。

「空我」

そのつぶやきを聞いて、空我はため息をつく。

「貴様と一緒に、気が滅入るな」

「悪かったな」

他愛もないやりとりを交わしていると大広間に電気が灯った。

「こつちで正解みたいだな。出迎えた」

空我はそう言って顎で広間の奥を指す。

見てみると、奥からゆっくりと一人の人影がこちらに向かって歩いてきていた。

「味方じゃ、ねーよな」

「当然、敵だ！」

空我が叫ぶと同時に散開すると左右から人影に向かって突進する。

徐々に輪郭を取り戻す人影は、真っ赤な装甲に身を包んだリスカのようなものだった。

「てえ！」

「！！」

空我は渾身の右拳、ガイアは振り下ろす右蹴りでリスカの左右から迫る。

捉えた！

そう思った瞬間、空我がはじき飛ばされた。

ガイアの蹴りをよけたついでに練り出された蹴りの一撃だった。

宙を舞うガイアの足を左手で掴み、リスカは風を斬るようなスイングでガイアを床に叩きつけた。

「がっ！」

一瞬意識が飛んだが、すぐに覚醒し、バウンドを利用してリスカから距離を取り姿勢を立て直す。

リスカは動かさず、その姿を見つめていた。

「誰だ、てめえは！」

「ガイアがそう問うとリスカはゆっくりと答えた。
「……………アサルト」

時間じくして別地点では。

扉が開き、ねくらは一歩外に踏み出す。

隣に降りてきたエレベーターの扉も開き、中からキリツサが
歩み出てきた。

「バラけたっすね」

「そうだな」

部屋を見渡しながら小さく言葉を交わす。

暫くすると、闇の奥から重厚なエンジン音が壁に響き、空気
をも揺らす。

「何か来るっすね」

「何が来ても、押し通るさ」

音は大きくなり、轟音と共に何かが迫ってくるのを感じた。

「よける！」

ねくらの合図で二人は左右に飛ぶ。空いた空間を吹き飛ばす
ように巨大なバイクが煙を上げて突っ込んできた。

「なんだお前！」

止まったバイクに向かってねくらが叫ぶ。

バイクから降りる人影、青い装甲を身にまとったリスカのよ
うなもの。リスカはゆっくりと腰から剣を抜き、ねくらに向か
って答えた。

「……………ジャッジメント」

抜かれた剣は展開し、青い粒子の刃を纏う。

「あの剣……………アーシヤが」

「疑うのはいいっすけど、こっちの潔白は証明されるっすよ。
だって」

剣を構え、ジャッジメントは呟いた。

「EX—カリバーン」

振る剣撃が青い軌跡を残し、床や天井をずらしていく。大広
間だったその場所は、カリバーンに切り刻まれ、崩れ潰されか
けた空間へと変わっていた。

「アーシヤのカレットヴルッフより性能いい筈っすから」

「いい筈ってなんだよ？」

「再現できなかったんすよ、機械神の技術を」

「つまり？」

「こいつは機械神側の犬っすことっすよ！ とびっきりの番犬
っす！」

斬り掛る剣を躲かしながら、二人は奥へと押しやられていく。
切り崩してできた壁と溝、これみよがしにある退路、気付いた
ときには既に遅く、二人は簡易的に作られた袋小路で動けなく
なっていた。

「機械神は生け捕り、だよね？」

「そうっす」

「こいつはどうすればいいのかな？」

「聞いてないっすね」

「じゃあ、見なかったことにしてもいいか」

「行くっすか？」

「当然」

赤い瓶を握り締め、ねくらは不敵に笑う。

「じゃあ、付き合うっすよ」

チョーカーに赤い薬をはめるとねくらは雄叫びを上げて走り出す。キリツサも笑いながらジャツジメントに向かって突撃する。



どれぐらい歩いたか。

神無は最深部、機械神の虚^{うら}まで降りてきていた。

もって来た電子地図が役に立った。

いや、こいつを使って導かれたといったほうがいいか、機械神に。

緑の線が作り出す立体映像に光るマークが八つ。

神無がいる最深部にもマーカーがひとつ。

色はない、ただ一つ、GODとだけ表記されている。

奥に進むと開けた広間に出て、その奥には玉座が置かれていた。そこに座る人影が神無に気付き、ゆっくりと立ち上がる。

「ようこそ、魔人」

白い服に、白い髪、瞳すら白い、真つ白な女性が静かな口ぶりで言葉を並べる。

「あなたが、いや、人々が来ると言うことは世界は変わってなかったのですね。残念です。王が明日を変えようとしてくれたのに、結局悪は潰^{つぶ}えなかつたとは、嘆かわしい。もお、これは時間が来たと言っても過言ではないでしょう。わたくし、第六の機械神が宣言いたしましたよう」

つらつらしやべったところで一呼吸入れてこう吐き出した。

「世界の、いえ、人類の終わりを」

何言ってるやがるんだ？ という表情をすると機械神は笑い、ゆつくりと近づいてくる。

「終わるのです、悪を持つ人類は。それが、私たちと王との約束です」

「王？ なんだってんだ、その王ってのは」

「王、それは私たちに自我を与えたもの。恐怖の象徴、私たちはひれ伏し呼んだのです。王と」

機械神は神無と対峙し、不機嫌に言い放つ。

「魔人、あなたは不愉快だ。刻み込まれた恐怖の記憶を呼び覚ます。消えていただきたい」

その言葉に神無は真つ向から反発する。

「過去の遺物が。向かう明日にお前らには必要ない。過去は、過ぎ去るのみだ」

バチイ！

火花が弾け、弾かれたように機械神と神無は距離をとった。

「悪のある世界を望まない。それが真理です。悪が増え、既にオーバーフローしている。だからこの世界を、リセットします」

「ブレイヤーの意思を無視してやり直すようなゲームマスターなど不要。俺たちの世界は、俺たちがつくる。良いも悪いもひつくるめてな！」

青い炎が燃え上がり、神無は魔人へと姿を変えた。

同時刻——地下の一室。

「がっ！」

弾き飛ばされ、空我は壁に叩きつけられる。

アサルトの暴威は止まることなく二人を責め立てる。

「このやろう！」

怒号と共に蹴り付けるもアサルトは全く動じない。それどころか、ますます力を増して襲いかかってくる。

二人は既に限界だった。

「くっそ、なんだよ、こいつ。一撃一撃はいつてーし、いくら蹴ってもふらつきもしねえ。不死身かよ」

荒い息をつきながらガイアがこぼす。

その横で、うなだれていた空我が立ち上がった。

「ふざけるな。こんなところで………止まれるか！」

一気にアサルトとの距離を詰めると震脚一点、舞い上がった瓦礫をもともしない右拳が一直線にアサルトの胸に突き刺さ

る。装甲の軋む音、大気の悲鳴、拳の手応え、全てが百パーセントなタイミングのその時、アサルトは何事もないように呟いた。

「……女は、失せろ」

鋼の拳が空我の顔面を捉え、また壁の位置まで殴り飛ばされる。それと入れ替わりでガイアがアサルトに襲いかかる。

「女の顔は、殴るもんじゃねえぞ！」

振り下ろす蹴りがアサルトの横つ面を捉えるが微動だにしない。一対一、肉薄した接近戦へとガイアは戦略を変えた。

一歩も譲らぬガイアとアサルトの殴り合い。

それを倒れながら見つめる空我は混濁した意識の中、ゆっくりと立ち上がる。

「……だよ」

ふらつく足で一歩一歩、二人の元に歩み寄る。

「私を……無視するな！」

震脚。

それもとびきり威力の大きい震脚だ。

部屋はたわみ、震脚の位置からクレーター状に変形していく。そして、地面が隆起することによって跳ね上げられたガイアとアサルトが空我目掛けて降ってくる。

「私は追いついたんだ。誰も私を置いて行かせやしない！」

右拳に力を込めるとその余力で髪が逆立ち、頬に、セイの文字が浮かび上がった。

「がああああああああああああああああ！」

雄叫びと共に拳をアサルトの腹に叩き込んだ。

装甲が軋み、陥没するように無数の亀裂が走る。

それでも、まだ足りない。

「置いていってなんているさ！」

ガイアの声が響く。

「置いていったんじゃない、俺たちは、違う道に進んだんだ」

アサルトの背に乗り、ガイアは静かに力を込める。右目の周りに大きな A が浮かび上がり、真上に飛ぶと、蹴りの形を作り、殴りあげられるアサルトを挟み討つ。

ベキッ！

へし折れ、砕ける音が響き、蹴りはアサルトを貫通した。

落下して地面に叩きつけられたアサルトは既に死に体でなん

の反応も起こさない。

荒い息を付きながら座り込む空我にガイアは話す。

「お前は追いついちゃいない。お前は別の道を歩き出したんだ。

近くにいたって、もう、俺や海、師匠とは交わらない。絶対にだ」

「それでも、私は！」

「無駄だ、名を偽る俺たちが、またあの日のように笑えるとは、思えない」

ガイアは寂しそうな顔で空我に手を差しのべる。空我はその手を取らず立ち上がるとガイアを睨みつけた。

「さあ、行くか」

そう言うってガイアは奥に向かって歩き出す。

空我もそれに続くように歩き出した。

同時刻——地下南側の一室。

キリツサは吹き飛ばされ、壁に激突する。

「かはっ！」

続いてねくらが床をバウンドしながら隆起した床に激突した。目の前に立つのは青い装甲をまとったリスカ、ジャツジメント。

「こいつは、やばいっすね」

ふらふらと立ち上がりながらキリツサがつぶやく。

「何とか剣は退けたんだがな」

軽く頭を振りながらねくらも立ち上がる。

既に RED を投棄し、鎌ではなく、箆手を装備したねくらは赤黒い目を輝かせ、ジャツジメントを睨みつける。

「こつちの攻撃は効かない、あつちの攻撃はまともに受ければ致命傷。ジリ貧だな、騎士団の」

「そうっすね。じゃあ、どうするっすか？」

「切り札を切る、一枚だけな」

ねくらは口角を歪めてそう言うのと赤い液体の入った小瓶を取り出した。

「んふ、切り札を使わなきゃ勝てないのは……」

「三流だって、言いたいんだろ？ でも、温存して死ぬのは」
「三流以下っスね」

声を抑えてクククと笑うとキリツサはトランクを構える。

赤い液体の入った小瓶を首のチョーカーにセットすると大きく息を吐き、ねくらは殺気を滾らせた。

「いくぞ」

「行くっスね」

声を掛け合って一気に走り出す。瓦礫を縫い、一直線にジャツジメントに向かって。

「動きを止める」

「あいさー」

右から攻めていくキリツサは右手に持ったトランクを振りかざし、ジャツジメントに殴りかかった。ジャツジメントはそれを防ぐように手をかざす。

「貫ったっス！」

ジャツジメントの手にあたる瞬間、キリツサはトランクを持った手をひねり、当たる部位を調整すると持ち手についた引き金を引いた。

ドッ！

発射音と共にトランクから槍が射出され、ジャツジメントの腕を貫き、押し上げた。槍が刺さった反動でジャツジメントは体勢を崩す。

「今っすよ」

ねくらはチョーカーのボタンを押す。小さい噴出音と共にセツトされた小瓶から赤い液体がねくらの頸動脈に注射され、一気に身体を駆け巡る。

「があ！」

吠えると赤い光がねくらの足を包み、粒子が集まってくる。粒子の纏わる足を振り上げるとねくらは力いっぱい振り下ろした。

ザンツ！

粒子によって形成された鎌の刃がジャツジメントの胸を貫いた。ねくらはそのまま振り下ろし、ジャツジメントを床に礫にする。

「くっ！」

チョーカーのボタンを押すと、赤い煙が排出され、気が抜けたようにねくらがへたり込んだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

荒く息をつくねくらにキリツサは笑って言う。

「この威力なら特に援護はいらなかったっすね」

その言葉にねくらは首を振った。

「ミスれば自滅で終わり。確実に打ち込めたのは援護のおかげだ」

足に付いた鎌の刃を外すとねくらは立ち上がり、大きく息を吐く。

「に、しても、こいつは一体何なんだ？」

床に張り付けられ、動かなくなつたジャツジメントを見つめながらねくらは疑問を口にした。

「そいつは王。でも劣化コピーって感じっすね」

「王？」

「聞いたことないっすか？ 三人の王の伝説」

「知らねえなあ、興味もねえ」

ねくらがそう返すとキリツサは笑つた。

「当然あちしもないっすよ。過去のことなんて」

「過去、か……：そーいや、いつやるんだ？」

「今回の作戦中は何もしないっすよ。多分ね」

「……………まあ、いいさ」

ねくらはそう言つて耳を澄ます。

微かに聞こえる音、声、これは、歌か？

これが聞こえた瞬間、ジャツジメントの動きが鈍くなつた。

誰の歌だ？

「おーい、行くっすよお」

向こうで手を振るキリツサに聞くのも癪だな。

そう思い、黙つたままキリツサについていく。



声、声だ、声が聞こえる。

襲い来る無数のコードを躲し、切り裂くように腕を振り上げ

る。機械神はその一撃を紙一重で躲し、優雅に舞うように距離をとる。

（イオ、イオ、イオ、イオ……）

（聞こえる、聞こえる、聞こえる、聞こえる！）

（機械神の方から、聞こえる！）

「お前かー！」

身体の主導権をイオが取り、大きく叫んだ。

「ボクを呼ぶ声がお前のようなガラクタスピーカーから溢れ出すだけのノイズだと！ 彼女の声が、ノイズ……侮辱するな！」

白い炎が燃え上がり、魔人をより深く輝かせる。イオは魔人体の顔を手で掴むと、黒い爪で握り潰し、殻の裂け目から叫んだ。

「ボクの名前を呼ぶな！ 呼んでいいのは一人だけだ！」

砕けた顔の粒子が集まり、顔の穴に新しい顔をつくる。その顔の表情は笑っているような、怒っているような、とても形容

しがたい複雑な表情だった。

その気迫に押されて半歩後ずさつたことをイオは見逃さなかつた。

「があー！」

一気に前に踏み出し、距離を詰めると力を纏わない右腕で殴

りかかる。機械神はそれを電磁バリアで防ぎ、距離を取ろうと

する。イオは後ずさる機械神に食らいつくようになんども拳を

叩きつけた。

「くつ、貴方は……鬱陶しい！」

拳の先に現れる電磁バリアが炸裂し、フィールドのように広がる。その反発力を借りて、機械神はイオから距離をとった。体勢を立て直し、機械神は言う。

「もう、終わりなのです、何もかも。逆らってどうします？ 終わりは決まっていた、いわばゴール……」

「黙れ」

神無が表に出て、機械神の言葉を遮る。

「聞こえるだろ、歌が。俺はこの歌を、聞きにいかなきゃならない。だから、終わりにしよう」

魔人の右腕が展開し、青い炎が滾る。

静かに、深く深く殺気を忍ばせ、心を燃やすように力を研ぎ澄ませていく。周りの鋼鉄が熱を帯び、大気が歪み、体感温度が底冷えするような感覚に満たされた頃、機械神の顔色が変わった。

「お、王だ。この恐怖、沸き立つような絶望感、王の帰還だ」

顔を蒼白にし、後ずさりながら機械神は言葉を続ける。

「デウスの国崩しが成った。王が帰ってきた。王が、王が、はははははははははははは。王よ！ お待ちしておりました、王よ！ 早く、私を躰り、蹂躪してください！」

何かに駆られるように、機械神はまっすぐ神無に向かって突進する。

まるで篝火に飛び込む蛾のように。

そこに希望があるかのように。

「GUILTY PAIN」

研ぎ澄まされた殺気を振りかざし、燃え盛る拳で機械神の胸を貫いた。

ブツッ……。

セピア色の世界。

これは、雨だ……雨が降っている。

誰かがステージにいる、あれは、マキナ？

歌っている、でも、声が聞こえない。

この土砂降りが、声を洗い流していく。

なんだよ、くそ、鬱陶しいなあ。

こんな雨……。

「晴れるよー！」

同時刻——法務ビル。

何百という歌を重ねてもそれにはたどり着けず、マキナは小さくため息をつく。

終わりが、近いみたい。

周りにいるリスカが一体、また一体倒れていく。

多分、私もここで倒れるのだろう。

だから、歌う。

私の歌を、探していた『出会いの歌』ではなく、貴方の為の『別れの歌』を。

モニターで見つめるアーシヤは退屈そうにため息をつく。

「フィナーレが、近そうですわ」

もう一つのモニターに目を移すとGODメーカーのある部屋に、突入していた四人が入っていくのが映し出された。

「アーシヤ！」

叫びながら大慌てでゼクスが部屋に入ってくる。

「なんですの？」

「天蓋が！」

「？」

「天蓋にヒビが！ 天蓋が砕ける！」

その言葉を聞いて、アーシヤは満面の笑みを浮かべた。

「なんだ、こりゃあ」

ガイアは部屋の惨状に言葉を失った。

ほの暗く分からなかったがガイアたちがもって来た電子地図からの信号で電灯が灯り、部屋の惨状を浮き彫りにする。

ガイアと空我、ねくらとキリツサはお互い向かい合った二階の欄干部分にいる。そこから見下ろすと細い通路から真ん中に広い足場がある。その周り、掘りの部分には詰め込んだようにギッシリとリスカの残骸が敷き詰められていた。そして部屋の真ん中、リングのような足場には一匹の魔人と白い女性が立っていた。

魔人の右手は機械神を貫き、未だ燃え上がっている。機械神

は小さく息を吐きながら、入ってきた四人の方に顔を向けた。

「人が……いない……やはり、滅ぼす、べき」

そのつぶやきとともに、部屋全体が起動する。唸りを上げ、張り巡らされたコードから玉座の奥にある機械にエネルギーが集中していく。

「あれを壊せば、終わりだな」

神無はそう言うと、貫いた右腕を引き抜き、機械神を床に落とす。そして、右腕を展開するとさらに力を貯め始めた。

「滅びよ、悪は、滅びよ」

壊れたCDのように同じフレーズを繰り返す機械神に神無は吐き捨てた。

「どうでもいい。今は、このけたたましい音で、歌が聞こえないことの方が重要だ」

悲しみの顔が崩れ落ち、魔人の顔が無表情に変わる。

「いくぞ、マキナ」

右腕を振り上げ、一気に駆け出す。

展開した右腕から迸る力はリスカの残骸を蹴散らし、細い通路を引き裂く。破壊を纏ったその腕を、神無は振りかざし、破壊を呼ぶ機械に叩きつけた。

ブツ……

セピア色の世界。

ステージに立つマキナは寂しそうに神無に話しかける。

「歌、見つけたよ。ずっと探してた」

「そうか」

「見つからないはずだよ。だって私が探していたのは出会いの曲じゃなく、別れの歌だったんだから」

「……………」

「とてもアップテンポの軽やかな曲で、絶対出会いを祝福する歌だと思ってた。だから出会いの歌ばかり歌ってきた。でも違った」

「残念だったか？」

「全然、嬉しかった。あなたとこういう出会いができて、こういう別れができて。私は、幸せでした」

「……いくな」

「無理だよ。だって私は機械神の残響。機械神が無意識のうちに創り出した、データの寄せ集めだから。機械神が消えれば、私も消える」

「俺がなんとかしてやる！ 来い！」

力強く神無はマキナに手を差し出した。

マキナは悲しそうに微笑み、その手を握った。

その直後、世界は闇に包まれる。

「もう、さよなら、だね」

そう言つて、マキナは手を離す。

闇に沈むマキナに、神無は力いっぱい手を伸ばした。

「絶対に、絶対に、助ける！ 手を、伸ばせー！」

その気迫に、マキナは躊躇しながらも手を伸ばした。

「助けてくれる？ もう、一人に怯えなくてもいいの？ 私と、いてくれる？」

「助ける！ どんなものからも、必ず！」

伸ばした手がマキナの指に触れ、マキナもその手を握り返した。

ボソツ——。

掴んだ手は灰となつて崩れ、マキナは闇に落ちていく。落ちる瞬間、マキナは寂しそうに笑つた。

「ありがとう、そして、さようなら」

天蓋は砕け散り、外を舞う砂嵐も一斉に舞い上がった。

そして、それらは緑の光となり、空気に溶けるように消えていった。

世界が色を取り戻す。

完全に停止した機械の前で、神無はうなだれ、彼女の名を呼んだ。

「…………マキナ」

その瞬間、右肩に亀裂が走り、腕そのものが地面に落ちる。

落ちた腕は灰となり、音もなく消えていった。

その姿を見下ろしながら、ガイアがつぶやく。

「作戦終了、つて、ことで、いいんだよな？」

「目的は、果たしたからな」

「外がどうなってるか、楽しみつつね」

「どうなっても変わらないよ。また、明日がくる」

プロジェクト『Sun Seeker』完遂。



法務ビルから眠る街を見下ろし、神無は深く息を吐いた。

「ここにいましたのね」

アーシャの声に、神無は振り返らずに答える。

「約束を守ってくれて感謝する」

「条件で契約ですわ。契約を破棄した覚えはありませんわ。それに、あなたは約束以上の働きをしてくれましたわ」

「俺は、俺のことをやったまですわ。ついでに、機械神も倒したかな」

「上出来ですわ」

手を叩いて微笑むと、アーシャは神無に歩み寄る。

「その上出来っぷりは契約以上の価値をもちましたわ。だから、何か望んでも、よろしくってよ？」

その言葉に、神無は振り返り、力強く言った。

「腕をくれ。強く、何があっても離さなくて済む腕を」

真剣な眼差しにアーシャは微笑む。

「よろしくってよ。最高のものを用意いたしますわ」

そう言ってアーシャは踵を返した。その後ろ姿に神無は問いかける。

「お前は、王を知っているか？」

歩みを止め、アーシャは振り返る。

「統べるもの、という意味ですか？」

「さあな、機械神が口にしていたから気になっただけだ。王が帰還したと」

「王の帰還？」

小さく呟くと顎に手を添え、アーシャは考え込む。そして、一つの答えにたどり着き、口を開いた。

「三人の王」

「三人の王？」

「そうですね、前に機械神のデータから拾い出した記録にそんな物語がありましたわ」

「物語？　どんな話だ？」

「ただの英雄譚ですわ。三人の王が悪を倒す」

「良ければ、教えて欲しいな」

神無は振り返り、アーシャと向き合う。

「別段面白くもない話ですわ。三人の王、力を司る剛力の王、法を司る知性の王、人を守る正義の王の話。神を模した怪物と戦い、勝つお話ですわ。そう、気になると言えば、最後の一説

『剛力の王は悪を倒して過去にとどまり、知性の王は平和維持の為、現在に生きる。正義の王は闇を払うため明日に向かった』と、ありましたわ」

「明日へと向かった、か」

「行動結果的に人の為に立つ、正義の王と重ねたのかもしれないま

せんわね」

神無は後ろからの光に気付き、振り返った。遠くに見える壁の向こうから眩しい何かが登ってくる。

「夜明けですわ。この街が初めて見る、本物の太陽の」

眩しさに目を細め、神無はつぶやいた。

「こいつを見るために、王は明日から帰ってきたのかもな」

外区。

ガイアは崩れた瓦礫に腰をかけ、一人で空を見つめていた。

「何か見えるか？」

そう言つて空我が側の瓦礫に座る。

「見えるさ、世界が」

そう答えて小さくため息をついた。

「なあ、空我、これからどうする？」

「これからか、まずは法務に変わる統制機関を作らないとな。」

当分は騎士団が担うがずつとつてわけにはいかない」

その話を聞いて、ガイアは薄く笑った。

「お前には展望があるんだな。俺にはもう、何も無いよ」

そう言つてガイアは瓦礫の上で横になる。

「天蓋を失い、リスカの恐怖も去った。ギルドは御役御免だ。」

解体し、騎士団と統合するのが望ましい。ギルドにケリをつけ

たら俺はまた、旅に出る」

「逃げるのか？」

「その言い方、好きじゃないな」

小さく笑い、ガイアは楽しげに話す。

「俺はこの街が好きだ。みんながいたこの街がな。でも、同時

に怖いんだ。また、壊してしまいうそで。だから俺は、ここには

いたくないんだ」

「……………壊せばいいじゃないか」

真剣な声で空我が言葉を紡ぐ。

「縛り付ける過去なら、壊せばいいじゃないか。わからないほ

ど、壊せばいいじゃないか。そして、それからまた作り直せば

いい。今の私たちなら、できるだろ？『陸』」

その言葉を聞いて、ガイアは微笑んだ。

「俺が恐怖を乗り越えられたら、また、笑おうじゃないか。そ

れまで、街を頼むぞ『空』」

結局交わらない二人はお互い軽く笑っただけだった。

そう、あの頃はまた、瓦礫だらけだったこの街で二人、天蓋

を見上げていた。

「ねえ、この街の名前しってる？ イカロスって言うんだよ」

「イカロスって何？」

「イカロスは神話の人物で、羽を持って空を飛んだらしいよ」

「飛んでどうするの？」

「太陽を目指すの」

「太陽？」

「そう、燃える星なの。この世界の頂点なの、だからイカロス

は太陽を目指すの」

「たどり着けたの？」

「うん、途中で羽が燃えて落ちちゃったの」

「死んじゃったの？」

「うん、でも、イカロスは最後まで太陽を目指したの。私も、最後の最後まで諦めず手を伸ばし続ける人になりたいの」

「そう、じゃあ、僕は空は飛ばないよ」

「なんで？」

「君が落ちてくるかもしれないんだから、キャッチしなきゃ。僕が君を支えるよ」

無邪気だったその面影を抱いて、ガイアと空我は微笑む。

「俺は、手を伸ばすよ。まだ見えない理想だけど、きつとできることがあるからさ」

「じゃあ、私はこの街を守るわ。あなたが理想から転げ落ちて、キャッチできるようにね」

二人は空を見上げる。

暑い太陽が塔の影で笑っていた。

—— 外区。

赤い飴玉を頬張り、ねくらは空を見つめる。

空はどこまでも青く、手を伸ばせば押し上げてしまうように軽く手応えがない。

「一夜明けて、どうっすか？ 気分は」

「何も変わってねえ」

話しかけるキリツサの言葉を受け流し、ねくらは大きくため息をつく。

「暇、になった」

「平和っていったほうがいいんじゃないっすか？」

その言葉に少し考えたがやっぱり口から出たのは暇という言葉だった。

「機械神を倒し、リスカが消え、押しつぶすような威圧感があつた天蓋、世界を閉ざす砂嵐、全部が消えたら退屈だけが残りちまった」

「それを求めていたんすから、いいことじゃないっすか？」

「少なくとも、私は求めてない」

「そう、じゃあ、あちしと組むっすか？」

「裏切りの話？」

やる気なく聞くとキリツサはニヤリと笑った。

「平和になんかならないっすよ。まだまだ、この世界は荒れる。どうっすか？ かき混ぜてみないっすか？」

「それも、悪くない、かな」

羽々切邸。

アーシヤはグラスを傾けながら物思いにふけていた。

「どうした？ 後悔とか、しちやってる？」

軽口を叩きながらドレッドノートが顔を出す。

「後悔か、してないですわね」

「そう、なら良かった」

優しく微笑み席に着く。アーシヤは遠くを見つめながら話を始めた。

「この街の名前『スネイル』は日本語に直すと『カタツムリ』という虫の名前になりますわ。この虫は、とても不思議な虫ですの。殻を持って生まれてくるのに、最後は殻を残して消えてしまう。誰も、カタツムリの行方を知らない。……誰がこの街にこの名前を付けたんだか知らないけれどよっぽど外に出たくなかったと見えますわ。殻と一生を共にするものの名前なんですから。でも、私たちは違いましたわ」

グラスを机に置き、窓から外を眺める。外は混乱もなく、いつものどおりの夜景だった。その夜景を見つめながら、アーシヤは話を続ける。

「殻を破った。世界と隔てる殻を、自分を守る殻を。殻を破ったカタツムリはどうなると思いますか？」

「潰したことはある、例外なく死んだな」

その答えに微笑み、アーシヤは話を続ける。

「そう、死にますわ。でも、わたくしたちは、死にませんわ。だって、殻に閉じ込められてただけでカタツムリではないですもの。わたくしたちは人間、押し破った殻を脱ぎ捨て、明日に進めるものですわ。殻を破れば死ぬ危険性だったであつた、それでも、その恐怖に打ち勝ち、前に進もうとしたんですわ」

「前か、そつちに何がある？」

「さあ、わかりませんわ」

そう言つて笑う。

「歩みが遅くても、進む。その先に、明日があるんですわ」

「復讐……過去はどうすんだ？」

「過去は振り返つて懐かしむものですわ。そう、何度も反復して、ね」

薄暗い雰囲気の中、ドレッドノートが口を開く。

「魔人は、塔に上るのか？」

「腕ができたなら、上るつもりですわね」

「そうか、上るか。神の塔、またの名を『ルルイエ』……死せる神が、夢見ながら待つ場所」

第五節 Night Snail 了

最終節 死恐心怖症

プロジェクト『Sun Seeker』から一週間、街は不気味なほど何事もなかったように時間が過ぎていた。まるで殻に閉じこもってしまったかのように人々は変化を恐れ、街は閑散としていた。殻を壊したというのに、その実、変化を恐れるとは、心というものは、全く。

神無はこの一週間、羽々切邸に用意された部屋で、右腕の完成を待っていた。

早く塔に行かねばと焦る心もあるが腕がなければ登りきれないという確信もあった。

（敵は必ず彼処にいる。その敵ってやつがなんなのか定かではないが必ずいる。俺を操ろうとし、×一を従え、魔人たちをばらまき、アインと斐文を捕らえている敵ってやつが。そいつをぶんどるためには、腕がいる）

『塔は一人でしか登れない』

ヤハヴェエの言った言葉が頭をよぎる。

（どういう意味かわからないが、俺は俺のやり方で登るしかない。もちろん他者には頼りはしない。それなのにああいう言葉を使った意味は……）

答えの出ない問答で時間を潰す。そうしていると誰かがドアを叩いた。

「失礼しますわ」

返事を待たずにドアを開け、羽々切アーシャが部屋に入ってくる。

「腕が出来ましたわ。早速、つけますか？」

「当然だ」

短く返事をして立ち上がる。

「こちらですわ」

先を歩くアーシャについて、部屋を後にした。

長く続く廊下を歩きながら、軽く言葉を交わす。

ここでの生活はどうかとか、人と触れ合っているかどうかとか、正

直興味のない質問ばかりだ。適当に相槌をうっていると、アーシャが笑う。

「興味ありませんわよね。こんな話」

「ああ、ないな」

「じゃあ、こういうのはどうかしら？」

そう言ってアーシャは一つの鍵を取り出した。ひりつくような感覚を抱く鍵だ。

「なんだそれは？」

「これはちよつとしたところから手に入れたデータを復元したものだ。グレイブニールというものですわ」

鍵を弄もてあそびながらこう続ける。

「数年前、塔出身のある者と取引した際に手に入れた物ですわ。これは魔人特有の共振反応を増幅し、行動不能、もしくは死に至らしめるものですわ。対魔人用、人間の切り札ってところですわね」

「何故それを俺に使わなかった？ いや、違うな、いや」

困惑しているとアーシャが説明を続ける。

「なぜ使わなかったか、理由は簡単ですわ。その時は持っていなかった、これを手に入れたのは先日、機械神とリンクし、データの復元が可能になったからですわ」

「そのための機械神討伐か」

「ご明察、ですわ」

そう言うと、アーシャは鍵を差し出した。

「差し上げますわ」

「何故？」

「これも理由は簡単。わたくし達が倒す魔人はもういないからですわ。それに魔人は塔から来る、貴方は塔へ行く、なら必然的に魔人と戦うことになりましたわ。これを使って魔人を倒してくだされば結果的にわたくし達は助かる、塔を無力化していただければ魔人も現れない。まさにWIN WINですわ」

高らかに笑いながらアーシャは語る。

「いや、おかしいだろ。何故に俺に渡す？ 塔を倒した後、俺は何をするかわからないんだぞ？」

「問題ありませんわ。それに、グレイブニールは魔人しか使えませんの、わたくし達もつけていても無意味なものなのですわ」
切り札なのに人間には使えない？ 矛盾している、いや、何かまだ隠しているのか。一瞬躊躇したが、神無はアーシャからグレイブニールを受け取った。

「さあ、話をしているうちに部屋につきましたわ。早速腕を接続しましょう」

ドアを開けると大量の工具が置かれた無数のワゴンとその中央に置かれた鋼鉄の台が目に入った。台の上には新しく組み上げられた右腕が固定されて置かれている。

「さあ、接続しましょうか」

無数の工具を見繕うアーシャに神無は短く言った。

「いや、いい。俺がやる」

それだけ言うと、固定された台から右腕を取り外し、接続部を切断された肩に押し付ける。傷口が鋼鉄の腕と融合し、銀の表面を一瞬で皮膚が被った。神無は二三度右手を動かし、神経が接続されたことを確認する。

「慣らすまでの時間は……必要ないみたいですよわね」

「ああ、すぐにでも、塔に登る」



いくつもの防壁、いくつもの門をくぐり抜け、神無は今、塔の前にいた。

「不思議だな、全く懐かしさを感じない。まるで知らない場所だ」

神の塔を仰ぎ、神無はそう呟いた。

こうやって塔を見上げるのは斐文が指さした時以来か。

「覚悟はよろしくって？」

そう聞くアーシヤに神無は振り返らずに答える。

「勿論だ。ここまで来れたことを感謝する。だが、ここからは俺一人で行く」

「わかってますわ。それに、わたくし達、思いの外忙しいんですの。貴方に付き合っただけはいられませんわ」

その言葉に神無はほほ笑む。

「じゃあ、またな」

「ええ、また」

神無は真つ直ぐ塔に向かって走り出した。その後ろ姿を見送りながらアーシヤは呟く。

「良い、後悔を」

突然、けたたましいアラームが鳴り響き、空中にイカロスの地図を映す。紫色のマーキングが三つ、塔の城壁を抜けて内区に入った。紫、多分この色は魔人とリスカのハイブリッド、それが三体内区に入ったとなると、大騒ぎになる。すぐさま電子地図を操作して騎士団に連絡を送る。

「ええ、わたくし達、思いの外、忙しいんですの」

自分たちはいかない、そちらで対処せよと言い切り口元を歪めると、アーシヤは高らかに笑った。

口を開けた入口を通り、神無は塔の内区に入る。そこは受付も何もなく、ただ、がらんとした空間だけが嫌な静寂をまとっていた。

「お待ちしておりました、神無様」

部屋の奥から一人のメイドが神無に向かって頭を下げる。白い髪、赤い髪留め、赤と青のオッドアイ、こいつは……魔人。

空気が変わるのを感じて、メイドは慌てたように言う。

「待ってください。私は敵じゃありません。ただの道案内です。

戦う気はありません」

両手を上げて必死に弁明するメイドの言葉に嘘は感じられず、

神無は握り締めた拳を解いた。

「私は主人にあなたを連れてくるよう命令されております。さあ、行きましょう」

メイドは緊張がほぐれ、にこやかに笑うと、奥にあるエレベーターに神無を促した。神無は警戒を解かず、その指示に従う。

（見渡した限り、それ以外の道はなさそうだな。まあ、呼んでいるのは知っている。なら、進むだけだ）

「ドアが閉まりまーす」

その声と共に扉が閉まり、エレベーターは一つの個室となる。

一瞬感じる浮遊感が、上昇を感じさせた。

「お前、どこかで見たことあるな」

そう聞くと、メイドはにこやかに答える。

「私のオリジナルは一度あなたと対峙しております。X-1A1、通称アイ。私は彼女の予備パーツです。そろそろ、到着します」

その言葉と共にエレベーターは止まり、扉が開けられた。

「もう頂上か？」

「いえ、主人の意向に沿って主要階にて一時止まらせていただきます」

「そんな暇は……いや、あるな」

そうだ、目的はひとつじゃない。

エレベーターから出るとメイドは一礼し、にこやかに微笑む。

「先のエレベーターで上へとお進みください」

扉が音も無く閉まる。それと同時に先の扉が自動で開いた。

神無は迷うことなく先へと踏み出し、その扉をくぐった。

扉の向こう、進んだ先は真つ直ぐな通路で、一直線に奥へと続いている。見つめる先に一人の人影が佇む。歩み寄ると、その人影は輪郭を露わにした。

「……斐文」

束ねた黒い長髪、燃えるような赤い瞳、検査服を身にまとった女性。斐文は薄く微笑み、悲しそうにつぶやいた。

「やっぱり、来ちゃったんだ」

「来るさ、お前が呼んだんだ」

「私は、呼んでないよ。呼んだのはアイン。私じゃない」

「いや、呼んださ。俺の名を」

そう言い切ると神無は一步踏み出した。

「それ以上こないで。私はもう、望んでない」

斐文が叫ぶが、神無は歩みを止めない。

「私は蛇！ あなたを咬し、神を討とうとした。でも、それは間違いだった！ 神は誰にも倒せなくて、何をしても無駄で、

全て思い通りにいかなくて、あなたを騙して、自分も偽って、なんだかわからなくなつて、全て嫌になつて、何もかも、何もかも！」

歩みを止めず、神無は斐文にどんどん近付く。叫ぶ斐文はう

なだれ、その前で神無は立ち止まった。

斐文は神無を見つめ、涙目で問いかける。

「ねえ、神無。私って誰？ アインの器を失って、作られた過

去に縛られて、あると思つてた自分は空っぽで、塗り固めた嘘しか残つてない。ねえ、私つて、誰？」

「お前は……斐文だ」

涙に濡れた瞳を見つめ返し、神無はそう断言した。

「未来も過去も器も神も関係ない。お前は、斐文だ。俺の知つてる、斐文だ」

「私……」

涙が頬を伝い流れ落ちる。

不意に、斐文はうなだれ、小さく呟いた。

『滑稽だな。穴の空いた器に何を注いでも、みたされないぞ』

斐文から溢れ出す殺気が、床を伝わり、神無に感染する。

「誰だ、お前」

『私か？ 斐文だ。お前もそう言つただろ？』

「違うな、お前は、誰だ？」

よろめきながら後ずさり、斐文はけらけらと笑う。

『私は、神だ。そう、呼称されている。お前の、いや、命の器、頂くぞ』

斐文は腰に差していた銃を抜くとよろめくように銃口をこめかみに押し付けた。

「……ねえ、神無。私……」

そこまで言つて、斐文の指は引き金を引いた。青い炎が燃え上がり、斐文を包み込む。そして、切り裂くように腕を振つて、

青い魔人が現れた。

「神、神神神、神かー！」

開いた神無の左手に変身用ナイフが現れ、それを逆手に握り直す勢いよく自分の胸に突き刺した。殺意の籠つた目をぎらつかせながら、神無は青い炎に包まれた。

「俺の、敵はあ！」

気迫で炎を吹き消し、漆黒の魔人が現れる。

黒い魔人は殺意を灯した赤い目で青い魔人を睨みつけると、歯噛むように装甲を軋ませた。青い魔人は壁に手を付け、炎を揺らめかせると接触した壁が弾丸となつて溢れ出すように床にこぼれ落ちた。

「……」

青い腕を振り上げると、床に散らばつた弾丸が宙に浮き、固定される。振り下ろす動作と共にその弾丸が黒い魔人を捕捉し、打ち出されるように発射された。

「ぐう、があ！」

黒い魔人は咆哮だけでその弾丸を払いのけると、青い魔人に向かつて叫んだ。

「俺の名を呼べ！」

青い魔人はその叫びに反応せず、機械的に腕を振り上げては降り下ろす。黒い魔人はその二波を、よけようとせず、再度叫んだ。

「斐文ー！」

突き刺さる弾丸から発生する共振に包まれ、意識がとぎれと

ぎれにかき消されていく。

気が付けば、そこは白い部屋だった。

壊れたテレビが無数に転がり、その奥で斐文が膝を抱えていた。

「私……私って、何？」

焦点の合わない目で、斐文が呟く。

「お前は、斐文だ」

そう返すと、斐文は首を横に振った。

「違う、私は一二三号。人を殺すための兵器。私は、私は」

砕けたテレビの残骸が集まりだし、巨大な機械を形作っている。大きな腕、強靱な口、ガラクタの翼、継ぎ接ぎで不格好なドラゴンが斐文を包み込み大きく口を開く。

「違う。お前は斐文だ」

神無はそう言うのと斐文に向かって歩み出す。

残骸のドラゴンは唸りを上げ、斐文を飲み込もうとする。

「失せろ、過去の亡霊」

神無が手をかざすと残骸のドラゴンは崩れ落ち、斐文だけがそこに立ち尽くしていた。

「さあ、斐文。俺の名前を呼べ。お前の声で、俺は戦える。お前を縛る過去なんか、俺が壊してやる、だから、行こう！」

火花のような思考が弾けて部屋に消えていく。白昼夢を振り払い、神無は叫ぶ。

「俺の名を、呼べ！」

手を振り上げたところで、青い魔人の動きが止まる。巨大な力に逆らうような震えの中、青い魔人は装甲を軋ませて呟いた。

「か……ん……なあ……」

その言葉を受け、黒い魔人は燃え上がった。

青い腕が降り下ろされる一瞬、黒い魔人は一気に距離を詰め、振り下ろす右手を掴んだ。

「今度は、手を取る。後悔なんかしない。絶対に離さない！」

「……神無」

赤い涙が青い装甲を伝い、炎に燃えて消えていく。神無は左手に何か握り込むと勢いよく青い魔人の腹に突き刺した。

『こ、これは……グレイブニール？』

「消えろよ、神様」

折るように捻ると装甲に引つ搔かれたノイズが狭い通路内に反響し、共振して増大されていく。

そのノイズの中で二体の魔人は崩れ落ち、中から現れた二人が笑う。

「神無、ありがと」

「守るって、言っただろ？」

そう神無が微笑むと、斐文はつられて微笑み、そのままゆっくりと崩れ落ちた。床に倒れる斐文に、神無は呟く。

「復讐は、俺が遂げる。お前の、未来と、過去と、今の分、きつちりとな」

倒れた斐文を壁によりかけさせて、神無は先へと進む。振り

返らず、前だけを見つめて。

先にあるドアが自動で開き、その先にはエレベーターと、一人のメイドが立っていた。X-11の予備パーツと言っていたメイドと同一人物だ。メイドが微笑むとエレベーターのドアは開き、神無を奥へと誘う。

神無は立ち止まることなくエレベーターに乗った。

「ドアが閉まりまーす」

音も無くドアが閉まり、また浮遊感と共に少しの重力を感じる。神無は押し黙り静かに怒りを燃やしていた。エレベーターは静かに止まり、音も無く扉が開く。

「では、先のエレベーターで上へとお進み下さい」

神無が歩み出ると、メイドはさつきと同じ台詞を言っ頭を下げる。そして音も無く扉は閉まった。

先を見るとさつきと同じように真っ直ぐ続く通路がある。まっすぐ殴りあえる、戦いやすい場所ってことか。怒りを滾らせながら神無は先へと進む。

「待っていたよ、神無、いや、イオ、それとも、神威か？」

通路の奥から一人の男が現れる。包帯で隠した顔、そこから覗く黒く深い瞳、白い拘束具を着た男が口角を歪め、笑いながら歩み出る。

「X-1か」

「違うな。俺もやつと舞台上に上がる気になった。いや、上がる時が来た。役名は『X-1』だ」

そう言うのと、顔の包帯を掴み、力任せに引きちぎる。中から現れた顔は、神無と瓜二つだった。

「俺はX No.最初の男。そして今日、最後の一人になる。お前を、殺してな」

X-1と対峙していると神威が話しかけてくる。

(俺にやらせろ。こいつには借りがある)

「そうだな、俺はこいつには全く興味がない。好きにやってくれ」

それだけ言うのと神無は神威に主導権を渡した。

「さあ、あん時の続きだ。逃がさんぞ」

「ここまで呼んでおいて、逃げるか」

X-1は胸ポケットから一枚のカードを取り出す。そのカードをかざし、手首についたリーダーに搔つ切るように通した。その瞬間、青い炎が燃え上がり、X-1を魔人へと変える。薄青い装甲に真っ赤に燃える長髪、魔人とは形容しがたい姿になったX-1は手にもったカードを燃やして笑う。

「さあ、行くぞ。悪魔のように」

神威も左手にナイフを握り、勢いよく胸につき立てる。黒い炎が漏れ出し、身体を焦がすと漆黒の魔人が黒煙を裂いて現れた。

「ああ、来いよ。天使のように」

刹那、二体の魔人は動いた。突き出した拳がお互い殴り合い、弾かれる。それに対応して

蹴りを放つが、それも写し鏡のように同じくぶつかって相殺された。

「……つまんねえ」

撃ち合いながら神威が呟く。

「なに！」

弾けて距離を取り、神威はゆっくりと話し出した。

「これは偽物だ。殺意もない、気迫もない、殺そうという気概がない。やるだけ無駄だ、興が削がれた」

「なん、だと」

「その姿といい、言動といい、お前は良く出来た偽物だ。永遠に本物にはなれない」

「だから、俺は、お前を殺すだろうが！」

壁を殴り、X1は唸るように叫ぶ。

「お前を殺し、お前を奪い、俺は本当のX No.1となる。俺を認めなかったアインも塔も、何もかもを壊し、俺が、王になる！」

その叫びを鼻で笑い、神威は口角を歪めて笑った。

「今まで戦った、誰よりも小せえな。悪いが、駄々っ子の痛癢に、付き合ってやるいわれはない。一気に終わらせるぞ」

「うぐうう！ 神無！」

殴りかかるX1に神威は右手を突き出した。右手は左右に展開し、中から二股に分かれた剣が現れる。

「死ね」

その言葉と共に剣に電流が流れ、レールガンを打ち出した。

何発も撃たれる弾は魔人の装甲を丸く消し飛ばし、虫食いのようにしていく。

「もう気が済んだ、タッチだ」

主導権を神無に移す。神無は右手を元に戻すと強く握りこみ炎を纏わせる。そして、倒れかかってくるX1に向かっていう。

「罪の痛みを、噛み締める」

「俺こそX No.1だ！ X1！ 俺が、俺こそが。俺を認めろー！」

叫ぶX1の顔面に力を纏った拳が突き刺さり、粉碎しながら振り抜かれる。

「お前じゃ、俺を阻む砂利にもならなかったな」

頭が粉々に砕け、横たわるX1に対して神無はそう吐き捨てる。X1の手の中で、使ったカードが燃えてなくなつた。

再び前を見据えると、自動扉が開き、その向こうでメイドが微笑んでいる。

「おつかれさまでした。主がお待ちです、さあ、行きましょう」
促されるままエレベーターに乗り込む。

「その主ってやつには、いつになったら会える？」

そう聞くと、メイドは微笑みながら「すぐですわ」と答えた。ずいぶんと長い時間、箱に閉じ込められたが終わりはきた。

「つきましたわ。では、よい後悔を」

メイドが微笑んでそういった瞬間、顔と腕が消し飛び、エレベーターが鮮血で彩られた。一瞬身構えるが、なんの敵意も感じられない。神無は神経を張りつめたままエレベーターを降り

た。この階は、他の階とは違って、拓けた空間になっていた。だから狙撃の線も考えたのだが、どうやら違うようだ。

臆することなく、真っ直ぐ部屋を突っ切る。しばらく歩くと、段差にぶち当たり、その上の玉座で男が笑っていた。

「ようこそ、神の塔へ。歓迎するよ。命の器を、持ってきてくれたからね」

男はそういうと玉座から立ち上がる。影になっていた顔がライトに照らされ、冷酷な笑を浮かび上がらせる。その表情を浮かばせるそいつ顔は……。

「……ヤハヴェ」

「？……ああ、この顔か。俺たちはある人物のクローンだからな、顔が同じことは抗えぬときさ。でも、そうだなあ、トウエルブが『唯一神』を名乗ったなら、俺は、そう、『神の王』を名乗ろうか」

「なんだって同じだ、お前が神を自称するならな」

「わかってないな。お前らが崇め奉りやすいように名を作ったんだ。喜べよ」

ボールは不気味に微笑むと腰から銃を抜き、ゆっくりと顔の前にもってくる。

「まあ、お前らとは、話を通じないのはわかっている。だから」銃口を口にくわえ、祈るポーズの親指を引き金にかける。

「一気にいくぞ」

祈りに力を込め、引き金を引くと、青い炎が燃え上がり、神

を魔人へと変えていく。青炎の中から現れたのは血のような赤い装甲を身にまとった一角の魔人。魔人は青い炎を吐き出すと不気味に笑った。

「これが魔人か……なるほど、滾るな」

神無は左手をかざし、ナイフを生成する。そしてそのナイフで胸を貫いた。

「変身」

青い炎が逆巻き、黒い装甲の魔人が現れる。

(神無、気合を入れる)

(ボクと変わるか？ 神無)

二人の声を聞きながら、神無は炎を滾らせる。こいつが元凶、こいつが斐文を、いや、こいつが世界を。青くたぎる炎に赤色が混じり、激しく燃え上がる。

「お前だけは、ぶっ飛ばす！」

「やってみるよ、失敗作！」

ボールは段差から飛び降り、神無は着地を狙うように一気に距離を詰める。ボールが着地した瞬間、神無は爪を振り下ろした。その一撃をバックステップで躲し、離れすぎない距離をとる。

もう一撃、息が整う前に、神無は一気にボールとの距離を詰めた。

振り上げた右手の一撃。

それは紙一重で躲され、かわりに赤い拳の一撃が脇腹を抉る

ように打ち込まれた。

「ぐっ！」

「もつとだよな」

その言葉と共にふらついて傾いた顔に打ち上げる一撃がお見舞いされた。

「一気に、だ。そうだろう？」

ボールは赤い右手に力を込めると装甲が展開し、青い炎が渦を巻くように収束していく。

「早過ぎるが、サヨナラだ」

そう言って右腕を振り上げる。

よけなければ、まずい。それはわかっているのだが、足が自由に動かなかった。

「ディザイア」

青い炎の一撃が、神無の胸に叩き込まれた。胸にある傷跡から亀裂が走り、全身の装甲を軋ませる。その衝撃に耐えることはできず、神無は入ってきたエレベーター付近まで弾き飛ばされた。

「意外と頑丈だな。オリジナルは」

右手から炎を振り払い、ボールは小さく息を吐く。

（かわるか？ 神無）

「いや、いい。俺がやる。俺がやらなきゃいけないんだ」

伏していた床から力を振り絞って起き上がり、ふらつきながらも神無は立ち上がった。

「はあはあ、神威、イオ、切り札を切る」

（ああ）

（OKだ）

神無は胸の亀裂に手を突き刺す。そして、中から銀色の銃を取り出した。

「なっ、それは！」

銃をこめかみに当て、神無は笑った。

「駆け上がるぞ」

引き金を引くと同時に、青い炎が燃え上がり、黒い装甲を燃やしていく。

「馬鹿な！ 魔人の重ね掛けだと！ ありえん！」

驚愕するボールに炎の中から神無が笑いかける。

「どうした、笑えよ。神様」

青い炎を吹き飛ばし、黒い魔人が現れる。その装甲には青い炎の模様が刻み込まれ、まるで全身が燃え立っているようだった。

「神威、イオ。力を貸してくれ」

（当たり前だ）

（一気に行くよ）

『ミックス！』

装甲の隙間から青い炎が燃え上がり、床を焦がしながら黒い魔人はボールめがけて走り出す。

「そんな付け焼刃！」

ボールは身構えたが、それより一瞬早く神無の膝蹴りがボールのみぞおちに突き刺さった。

「ぐっ！」

浮き上がる身体を薙ぐように神無のフックがボールの顔を殴り飛ばす。勢いよく半回転したボールを、神無は左足で蹴り上げる。そして、右腕を展開し、力を集中させた。

「さあ、罪の痛みを、知れ！」

蹴り上げられ、落ちてくるボールに、神無は拳を引き絞った。

「GUILTY PAIN！」

一撃。

炎を纏った拳が、ボールを貫いた。ように見えた。

神無の拳はボールを捉える寸前で止まり、ボールは床に着地する。荒い息をつきながら、ボールは笑った。

「何故、俺が持つてないと思った？」

そういうとボールは右手を開く。そこには十字架の形をしたアクセサリーが握られていた。

「グレイプ……ニール」

「そう、当然持つてるよな。対魔人用なんだから」

そう言って十字架を握り潰すとノイズが溢れ出し、神無は悶絶しながら膝をついた。

「さすがに、魔人体の俺にも効くが、重ねがけをしたお前よりは、動けるぞ！」

憤りと共に神無を蹴り飛ばす。神無はノイズに囚われ、まと

もな動きが取れなくなっていた。そんな神無を見下ろし、ボールは静かに言う。

「さあ、命の器。いただくぞ、バラバラにしてな！」



時間は遡り、地上。

神無が塔に突入した後、塔の中から魔人とリスカが混ざったものが次々と溢れ出していた。

「社長、あちしだけじゃ、流石に限界っすよ」

槍を射出しながらキリツサがぼやく。確かに、この数はまずい。でも、街の復旧を急務としている騎士団は呼べないし、ギルドは機能していない。エクスマは修理中で私は戦えないし、ここは奥の手を。そう考えているうちにも敵はどんどん出てくる。

「仕方がありませんわ」

アーシヤがそういったと同時に三つの人影が敵の前に躍り出した。

「俺は強いぞ！ 世界で二番目にな！」

黒いロングコートを翻し、赤黒い長髪の男、グロリアが叫ぶ。

「死してこそ……いや、生きてこそだよ、ねえ、イオ」

笑った仮面を外し、クラウンは薄く微笑んだ。

「兄さんの留守ぐらい、守ってみせるよ」

白い髪に青い目の少年、サウザントが瞳に決意を灯して現れた。

三人の魔人が人間たちを庇うように、敵の前に立ち塞がる。

「タイミング、バッチリですわね」

アーシヤがそう言うとグロリアは薄く笑った。

「そのほうがありがたみあるだろ？ それに、助っ人は遅れてくるもんだ」

「来ていただけるなんて想定外だったから、奥の手、呼んじやいましたわ」

アーシヤがそう言うと一つの人影が飛び出し、サウザントに飛びついた。

「あ、アイ！」

「会いたかった！ サウザント！」

空我に砕かれたはずのアイが元氣一杯で現れる。

「感動って感じじゃ、ありませんわね」

苦笑いでそう言うと、アーシヤは塔を見上げた。

「さあ、こつちも、やりますわよ」

「ああ、いくぜ」

葉ケースを耳元で鳴らし、グロリアが笑う。

「最後だ、派手にな」

コートを翻し、胴に巻かれた爆弾のスイッチを握りしめる。

「行こうか、アイ」

「行こう、サウザント」

サウザントの首に黒い痣が浮かび上がり、アイは舌を出して笑う。

『変身！』

「へえんひん！」

四人は掛け声を上げて菓を飲み、スイッチを押し、苦しみ、舌を噛み切った。

舞い上がった爆炎のその中から四体の魔人が現れた。

『さあ、行くぞ』



「ぐっ！」

黒い装甲片が舞い散り、黒い魔人はよろめいた。

「どうした、神無。やり返しても、いいんだぞ！」

振りかぶった拳が、叩きつけるように降りおろされ、火花と共に装甲片が散る。グレイブニールの影響により、神無は未だにうまく動けずにいた。

「かわいそうになあ、神無。あんな毒婦の奸計かんけいにはまらなければ、こんな目に遇わずにもすんだろうに。同情するぜ！」

ボールの拳が顔面を捉え、神無は青い炎をまき散らせながら、後ろに吹き飛ばされた。

「くっ！」

神無は踏ん張り、けして倒れようとしなない。心までは折れな

い、その決意から出るささやかな抵抗なのかもしれない。

「アインは……毒婦なんかじゃない……」

イオに切り替わり、白い炎を燃やす。

「じゃあ、なんだって言うんだ？ 弄んで、壊して、さらに苦しみを強要する、毒以外の何物でもないだろう？」

「お前に、何がわかる！」

力を振り絞り、拳を握ると、ボールに殴りかかった。しかし、その動きは余りにも鈍く、半歩後退されただけで、虚しく宙を切った。

「わかるさ！」

穿つような膝がイオの鳩尾を突き刺さる。

「があっ」

倒れぬように頭を掴むとボールは楽しそうに語る。

「俺はなんだってわかるぞ、イオ。お前らが仄かに感じていたくっだらな恋心や心が通じたように感じる妄想上の愛だとか。俺にはわかるんだぞ、妄想で、幻想で、勘違い甚だしいうってことまでな！」

高らかに笑いながら突き飛ばす。イオはよろめきながら怒りに震えた。

「何が、何が！」

「わかるさ、お前らにそんな感情がないことだってな。お前を作ったのはアインだが、心を作ったのは俺だぞ。アインだって頭脳として作られた生命体だ、愛などという感情が、あるか。」

お前らが駆り立てられたのは他者がどうなるか知りたいという好奇心、それだけだ」

「違う！ 僕は！」

「違うな。残念だったな？」

振りかぶったハイキックが黒い魔人のこめかみを捉え、打ち抜かれる。

立ち続ける気力を失ったイオがゆっくりと崩れ落ちるが中にいた神威はそれを許さなかった。

「否定されたぐらいで、無くなる想いじゃ、ねえだろうが」

動かない身体を力任せに振り起し、義手の入った右腕を振り回す。

「神威か。君は、実に……不愉快だな」

「それは、混ざっているからか？」

勢いをつけて右腕を振り払う。他の装甲と違い、中身の入った右腕は加速をつけてボールに振り上げられた。

「そうだな、純粹に作ったはずなのに濁っている。実に不愉快だ！」

襲いかかる右腕を掴み、引き寄せると同時に蹴りを放ち、身体を突き放す。

「がっ！」

「義手に仕込むなんてくだらん知恵も使う。小賢しい」

固定された身体に、なんども蹴りが突き刺さる。砕け散る装甲に、神威の意識は途切れ、神無が息を吹き返す。

「があっ！」

蹴りにより右腕がもがれ、壁に叩きつけられる。黒い装甲が力無く崩れ落ち、神無は背中をすりながら床にへたり込んだ。

「さて、そろそろ、いたただくか」

もぎ取った右腕を投げ捨て、ボールが神無に歩み寄る。

「ん？ 貴様……」

ボールは神無の襟を掴み、無理矢理引き起こすと、目を細めて命の気配を探る。そして、怒りに震えた。

「欠けている！ 欠けているだと！ 貴様！ 器に何をしたら！」

怒りに震え、詰め寄るボールに神無は薄く笑う。

「知るかよ」

「失敗作が！」

ボールは叫ぶと、神無を床に叩きつけ、蹴り飛ばす。

「欠けている、だと。いつ、どこでだ？ ここまで来て、また計画を延ばさねばならんとは。ぐうう、まあ、いい。欠片は探す。命は下界に腐るほどあるが、満たすべく器が欠けていては意味がない。ぐうう」

ブツブツ独り言を呟くボールをよそに、神無は意識を手放しかけていた。

（もう、ダメか。俺は……）

そう考える神無に、二つの人影が歩み寄る。

「神無」

顔を上げると、そこにはイオと神威が立っていた。

「敵は強いな、どうする、諦めるか？」

（心にもないこと、言うなよ）

「でも、君はもう限界みたいだ」

（大丈夫だ、まだ、やれる。アインも、助けなきや、だしな）

「そうかい、なら、今一度、燃やすか？」

（燃やす？）

「そう、魔人つてのは、命を燃やして燃え上がるもの。まだ、残量あるだろ？」

（残量？）

「そう、僕達の命だ。僕たちは三人に分かれて、一つ一つの命を持った。今、一つにして、燃やさないか？」

（そんなことしたら、イオと神威は）

「燃えカスになるな、でも、いいぜ。お前になら、くれてやる」

「僕も、神威にはやりたくないが、神無、君になら、いいよ。

だから、もう一度」

「燃え上がれ！」

横たわる神無の右肩から青い炎が燃え上がる。

「俺は、今まで」

ゆっくりと立ち上がりながら、神無は言葉を繋げる。燃え上がる青い炎は輪郭を持ち、右腕へと姿を変えた。

「命を燃やしてきた。憤怒、憎悪、嘆き、たくさんの不純物をくべて。でも、これで終わりだ。この青こそ、俺の純粋な命の

色。これが俺の、最後の魔人だ」

ボールと向かい合い、神無は人間体のまま、右手を引いて構えた。

「魔人体にもなれぬ貴様に何ができる！」

「これで終わりだ、この一撃で！」

神無はそう叫ぶと右腕を燃やしながら一気にボールに向かって走り出す。

「罪の痛みを、知れ！」

「そんなもの！」

「GUILTY PAIN！」

一閃。

空を焼くような青い軌跡を描き、神無の右腕がボールの胸を

貫いた。

静寂。

貫いた右手がゆっくり開き、握っていたものを手放す。一発の弾丸が床で軽い音を立てた。

「なん……だと……」

赤い装甲が砕け、生身のボールが現れる。胸を貫いた炎の腕は消え、胸に穴の開いたボールはへたりこんだ。

「馬鹿な、俺が、死ぬ、だと。神である、俺が、死？ 嫌だ、俺は、この世界を……がはっ！ はあはあ、なんだ……意外と

……怖くないな」

血を吐きながら、ボールは床に倒れ、動かなくなった。

「……行かなきゃ」

満身創痍の神無はそう自分に言い聞かすと重い身体を引きずりながら、上に続く階段を上っていく。

ヤハヴェの言ったことは本当だった。

一人じゃなきゃ、塔は登れない。

でも、一人じゃなかったから、俺はここまで来れたんだ。

最後のここには、俺一人で来ちまったけど。

俺は、一人じゃなかったんだ。

そして、今も、俺は、一人じゃない。

階段を上り終えると、一つの部屋にいた。部屋の真ん中にはコールドスリープ用のカプセルが置かれている。神無はそれに歩み寄り、中を確認した。

「やつぱり、ここにいたんだね」

コールドカプセルの中で眠るアインに神無は薄く笑った。

左手に力を集中させ、かろうじて小さなナイフを生成する。そして、そのナイフを振り上げると、眠るアインの胸に突き立てた。

「神無！」

呼ぶ声に振り返ると、そこには斐文が青い顔をして立っていた。

「斐文、ごめん」

神無は悲しさを含んだ笑いを浮かべる。その直後、その身体

は灰となり、崩れ落ちた。

「神無！」

斐文は崩れた神無の灰に駆け寄り、崩れゆくそれを掻き集め抱きしめる。

コールドカプセルの蓋が開き、アインが起き上がった。アインは胸に空いたナイフ跡を指でなぞりつぶやく。

「イオ……なんで」

斐文は涙で顔をグチャグチャにしながら起きたアインに詰め寄った。

「ねえ、あなた神様と一緒にいた人なんですよ！ 神無を生き返らせて、神無を、返してよ！」

「わ、私は……」

「お願い……神無を。私、神無に何も言っていない。神無に何も伝えられてない。神無を」

「私も……イオ」

「やればいいじゃん、世界変更」

眠そうな声とともに、部屋の奥から一人の少女が現れた。金色の髪に、眠そうな目、潰れた猫のぬいぐるみを抱いた一人の少女。

「ドライ……」

アインが名前を呼ぶとドライはほほえみ眠そうに話す。

「この結末が気に入らないでしょ？ じゃあ、変えていいよ、この世界。アインなら出来るじゃん。私たち、神の頭脳だもの」

「……わかった。私も、こんな結末、望んでない」

アインは立ち上がり、胸に手を当てると大きな声で叫んだ。

「コード、ブレイン1！ 世界変更！」

胸から溢れる光を掴むとそのまま引つ張り出す。巨大な鍵がアインの胸から引き出された。

荒い息をつきながら、アインは斐文に問う。

「あなたは、どんな世界が欲しい？」



ゆるい風に木の葉がざわめく。

巨大樹の下で、子供たちは小さな寝息を立てている。

一人で眠るもの、絵を抱きしめて眠るもの、兄妹寄り添って眠るもの、その一番奥、巨大樹に一人の女性が寄りかかり、膝枕をした男性を慈愛に溢れた眼差しで見つめていた。ふと、男性が目を開ける。

「……イオ」

「アイン……良かった」

「良かった？」

「うん……夢を見たんだ。アインが、居なくなってしまう夢を。」

すごく辛くて、悲しくて、泣きたくなるような夢を」

そう話しながら涙ぐむイオをアインは抱きしめ、耳元で囁いた。

「私はどこへもいかないよ。だって、そのために『楽園』を作

ったんだもの」

この、もう一つの天国を。

俺は、生きていた。

正確には、生き返ったのか？

かつて神の塔を見上げた時のように、ユグドラシルを見上げる。

この世界樹は、かつて神の塔だったもの。

あの日、世界は壊れた。

そして、直ったんだ。

アーシャに聞いた話によると塔は光って大樹になり、魔人たちはその中に消えたそう。

そして、俺と斐文はその世界樹の中から現れたらしい。

全てが、夢のような話だ。

俺の身体の中には、もう、誰の気配もしない。

俺は、一人ぼっちになってしまった。

いや、違うな、俺には斐文が、仲間がいる。

そして、明日がくる。

人は、恐れるものだ。

それは死であり、時間の流れであり、終わりである。

それから目をそらし、人は今を生きる。

人は、恐怖を感じ動けなくもなるだろう。

しかし、明日は必ず来る。

人は一步を踏み出す、勇気をもっている。

その場に留まろうとしなければ、その未来は無敵大だ。

その勇気で明日を迎えに行く。

恐怖と共に、未来を、迎えに行く。

大樹ユグドラシルを見上げ、神無は薄く微笑む。

「神無」

呼ばれて振り返ると、そこには斐文がいた。

「私たち、最初に目指したゴールにはつけたよね？」

「ああ、そうだな」

そう返すと斐文は満面の笑みで言った。

「じゃあさ、次はどこに行く？」

「次か、そうだな……」

顎に手を当て、考えたフリをすると神無は笑いながら答えた。

「とりあえず、明日かな？」

神無は歩き出す。

神無としての物語を。

さあ、行こう。

今の向こう側へ。

PHOBIA

「ぐ、ぐううう」

地面に這い蹲り、ボロ雑巾のような服装の男が低く呻く。

「神無ああああ」

そこに一人の女性が現れた。

「いざまだな、X1」

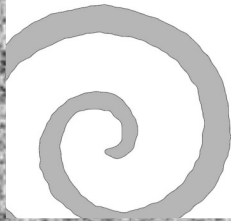
「……X4お」

「ここでは、ドレッドノートと呼んで欲しいな」

ドレッドノートの後ろからアーシヤが

歩み出て、這い蹲るX1にこう言った。

「取引、いたしませんこと。」



THE END?

創作集団 Jura

正会誌第32号

2015年6月20日発行

編集雑用:猫丸

校正スタッフ:

牧野健太

山下修二

……他

発行人:丸 智司

発行所:文京区小石川1-13-9-307

印刷所:ちよ古っ都製本工房